

Title	珍禽異獣奇魚の古記録
Sub Title	Old records of uncommon animals in Japan
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 No.37 (2005.) ,p.33- 59
JaLC DOI	
Abstract	動植物の記載で年記や地域が明確な事例は，過去の環境や人々の関心のあり方を知る手掛かりとなる。そこで先に動物についての略年表「幕末までの珍鳥奇魚捕獲記録」を本誌に載せ，ペリカン，オオサンショウウオ，マンボウ，リュウグウノツカイなどの捕獲・観察記録をまとめた（磯野2002，第9節）。しかし，漏れた事例もあり，また新資料の調査などで記録が増えたので，事項を大幅に増した年表を作成した。今回は，現在必ずしも珍品ではないが，当時の人々には馴染みの薄かったヨウジウオやコバンザメなども加えた。逆に，当時はありふれていたが，今は姿を消したトキやコウノトリなど現代人にとって珍しい動物も取り上げた。
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20050000-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

珍禽異獣奇魚の古記録

磯 野 直 秀

Old Records of Uncommon Animals in Japan

Naohide ISONO

動植物の記載で年記や地域が明確な事例は、過去の環境や人々の関心のあり方を知る手掛かりとなる。そこで先に動物についての略年表「幕末までの珍鳥奇魚捕獲記録」を本誌に載せ、ペリカン、オオサンショウウオ、マンボウ、リュウグウノツカイなどの捕獲・観察記録をまとめた（磯野2002, 第9節）。しかし、漏れた事例もあり、また新資料の調査などで記録が増えたので、事項を大幅に増した年表を作成した。今回は、現在必ずしも珍品ではないが、当時の人々には馴染みの薄かったヨウジウオやコバンザメなども加えた。逆に、当時はありふれていたが、今は姿を消したトキやコウノトリなど現代人にとって珍しい動物も取り上げた。

凡例

- 1 この年表には、慶応4年（明治元年, 1868）までの記録を採録した。アザラシ・アシカ・ウミガメ・クジラなど、記録が多出する動物では一部だけを年表に採用した。
- 2 捕獲・観察年が特定できない事例、蘭船・唐船などで持ち込まれた動物、白亀・双頭蛇・四足鶏などの変異体は、原則として除いた。
- 3 狩野常信や毛利梅園の写生は捕獲地や捕獲日時が不明だが、多くの場合、捕獲地は江戸周辺、捕獲から間もない写生と思われるので、写生年月日の個所に置いた。享保元文産物絵図帳の記載などもこれに準じて扱った。
- 4 種名まで同定できない場合は、アザラシ、ウミガメ、クジラなど、総名を記した。
- 5 長さの単位、間・丈・尋などは原記載どおりとした。
- 6 表中の人名の解説、動物のグループ別にまとめた各論を付し、文献は稿末に一括した。

〒232-0066 横浜市南区六ツ川 3-76-3-D210, 慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received Sept. 10, 2004]

年月日 (○は閏月)	現和名	記事・出典 (数字は巻番号)
推古27年 (619) 4月4日	オオサンショウウオ?	近江国蒲生川で、人のような形のものを得る (日本書紀)
推古27年 (619) 7月	オオサンショウウオ?	摂津国の堀江で、赤子のようで、魚でもなく人でもないものを網で得る (日本書紀)
斉明4年 (658)	ハリセンボン	出雲国が、フグほどの大きさ、雀のような口で、鱗が針のような魚が多く死んだと報告 (日本書紀)
延暦16年 (797) 8月16日	オオサンショウウオ	平安京の宮殿の側溝で魚を得る。長一尺六寸で、形は常の魚と異なる。ある人は鰻魚という (日本紀略)
弘仁4年 (813) 4月9日	アカショウビン	右衛門府が、カワセミに似て真赤な鳥を献上 (日本紀略)
仁寿2年 (852) 3月7日	オオサンショウウオ	近江国で奇魚を得る、古老はみな鰻魚という (文徳実録)
貞観12年 (870) 2月29日	タイマイ?	佐渡から「鳥鰻・赤甲」の奇魚を献上 (三代実録)
仁和4年 (888) 7月5日	アカショウビン	中務省が、赤黒く、鳩ほどの大きさの鳥を捕える。ある人は乞水鳥かという (日本紀略)
永享2年 (1430) ⑪月28日	ペリカン	舟津の漁師が、全身白く、嘴の下にウタ袋のある大鳥を京都に持参する (看聞御記)
天文14年 (1545) 3月20日	ウミガメ	小田原浦の砂地に上った大亀を捕えるが、のちに海へ戻す (北条五代記)
天正2年 (1574) 5月28日	ヒゴイ (緋鯉)?	琵琶湖竹生島辺で2尺5寸の金魚を捕える (随観写真・魚部：朝鮮鯉の項)
慶長12年 (1607) 6月	ウトウ	宇都宮藩主奥平家綱、塩漬けのウトウを父に贈る (当代記)
慶長19年 (1614) 4月5日	オサガメ?	駿河の浜辺で得た「背黒くして亀甲の如く、首は犬に似て尾三股」の魚を江戸城へ運ぶ (徳川実紀)
元和1年 (1615) 11月	ラッコ	松前藩主松前慶広、將軍秀忠に長7尺のラッコの毛皮を献上する (寛政重修諸家譜154)
寛永16年 (1639) 2月	トキ	加賀藩が近江から100羽を取り寄せて、越中砺波郡に放つ (南部2000) ➡1790年項
寛永19年 (1642) 5月14日	クビワオオコウモリ	將軍家光が紀伊藩の世子徳川光貞に琉球八重山蝙蝠を下賜 (徳川実紀)
正保3年 (1646) 2月4日	マンボウ	深川の漁師が「万歳楽」という長1間2尺の魚を捕え、江戸城に献上、5日に家光が上覧 (徳川実紀)
正保4年 (1647) 4月2日	アカマンボウ	房州の漁師が「魴魚に似て長4尺・幅2尺3寸の赤い魚」を江戸城に献上 (徳川実紀)
正保4年 (1647) 4月3日	アシカ	葛西の漁師が江戸城に献上 (徳川実紀)
慶安2年 (1649) 2月12日	オットセイ ⁽¹⁾	釜石浦より1頭、盛岡に届く (盛岡藩雑書)
慶安3年 (1650) 12月14日	オットセイ	八戸白金浜より1頭、盛岡に届く (盛岡藩雑書)
慶安3年 (1650) 12月22日	オットセイ	八戸白金浜より1頭、盛岡に届く (盛岡藩雑書)
慶安4年 (1651) 10月26日	オットセイ	八戸白金浜より1頭、盛岡に届く (盛岡藩雑書)
慶安4年 (1651) 11月11日	オットセイ	閉伊山田浦より1頭、盛岡に届く (盛岡藩雑書)
慶安4年 (1651) 11月17日	オットセイ	八戸小船渡より1頭、盛岡に届く (盛岡藩雑書)
慶安4年 (1651) 11月26日	オットセイ	八戸白金浜より1頭、盛岡に届く (盛岡藩雑書)
慶安4年 (1651) 12月9日	オットセイ	八戸白金浜より1頭、盛岡に届く (盛岡藩雑書)
慶安4年 (1651) 12月10日	オットセイ	北閉伊金浜浦より1頭、盛岡に届く (盛岡藩雑書)
承応3年 (1654) 9月5日	ペリカン	盛岡藩の郡山 (盛岡の南西方) で撃ち落とす。のち、江戸へ送る (盛岡藩雑書)
明暦2年 (1656)	ジャコウネズミ	ジャガタラから長崎に侵入、定着 (長崎年暦両面鏡)
寛文2年 (1662) 7月9日	アネハヅル	紀伊藩主より幕府に献上 (承寛樸録、錦窠禽譜・続8)
寛文4年 (1664) 11月13日	ウミガメ	大坂の浜辺に上がる、長4尺7寸 (摂陽奇観)
寛文5年 (1665) 12月10日	イワヒバリ	狩野常信が写生 (鳥写生図巻)

寛文6年(1666) 2月27日	ウトウ	陸奥湾に面する外ノ浜で捕獲(錦窠禽譜・続10)
寛文6年(1666) 5月3日	ウトウ	狩野常信が写生(鳥写生図巻):蝦夷人の献上品
寛文6年(1666) 10月3日	シジウカラガン	狩野常信が写生(鳥写生図巻)
寛文7年(1667) 2月7日	ソデグロヅル	狩野探幽が翼などを写生(探幽縮図) ⁽²⁾
寛文7年(1667) 3月16日	ウトウ	弘前藩主津軽信政が献上(徳川実紀), 同月25日に狩野常信が写生(鳥写生図巻)
寛文9年(1669) 6月17日	トキ	八戸藩, 水田を荒らすトキを撃たせる。元文2年(1737) 6月14日にも駆除を許している(トキの文献66・67)
寛文9年(1669) 7月15日	ノガン	狩野常信が剥製?を写生(鳥写生図巻)
寛文11年(1671) 6月24日	ヤツガシラ	狩野常信が写生(鳥写生図巻):松平出羽守の献上品
延宝1年(1673) 7月20日	ツクシガモ	狩野常信が写生(鳥写生図巻)
延宝1年(1673) 11月20日	アリスイ	狩野常信が写生(鳥写生図巻)
延宝3年(1675) 6月19日	オガサワラオオコウモリ, ハシプトゴイ, セイケイ類, アカガシラカラスバト, オガサワラカラスバト, オガサワラマシコ, メグロ	幕府の探険隊が無人島(小笠原諸島)で発見, ハト以外の鳥を持ち帰る(通航一覧附録12, 磯野1997, 鈴木2002・2003・2004) ⁽³⁾
延宝3年(1675) 7月13日	メグロ	狩野常信が上項の持ち帰り個体を写生(鳥写生図巻) ⁽⁴⁾
延宝4年(1676) 10月20日	ヨタカ	狩野常信が写生(鳥写生図巻)
延宝5年(1677) 12月14日	キバシリ	狩野常信が写生(鳥写生図巻)
延宝7年(1679) 4月16日	マツカサウオ	狩野常信が写生(草花魚貝虫類写生図28)
延宝7年(1679) 5月9日	イトヒキアジ	狩野常信が写生(草花魚貝虫類写生図28)
延宝7年(1679) 5月9日	ウミスズメ(魚)	狩野常信が写生(草花魚貝虫類写生図28)
延宝7年(1679) 12月17日	オニカクウ	狩野常信が死鳥を写生(鳥写生図巻)
天和1年(1681) 4月8日	ブッボウソウ	狩野常信が写生(鳥写生図巻)
天和1年(1681) 9月11日	ペリカン	花巻の町民が豊沢川で得て, 盛岡藩に献上(盛岡藩雑書)
天和2年(1682) 6月14日	シマゴマ(鳥)	狩野常信が写生(鳥写生図巻)
天和3年(1683)	オオサンショウウオ	天和年間(1681~本年), 武州の牛込高田川で捕獲する, 長3尺(日東魚譜)
元禄1年(1688) 秋	シマフクロウ	松前藩主松前矩広が水戸藩主徳川光圀に, 丹頂2羽・鳥鼻1羽などを贈る(快風丸渉海紀事, 佐藤1978)
元禄4年(1691) 6月12日	アカグツ(魚)	狩野常信が写生(草花魚貝虫類写生図28)
元禄4年(1691) 9月6日	ヤイロチョウ	狩野常信が写生(鳥写生図巻):渡り鳥か輸入品か不明
元禄10年(1697) 4月9日	マンボウ	備前国児島郡胸上村で捕獲し, 岡山へ移送して人々が見物, 長5尺(備陽記)
元禄11年(1698) 6月27日	ダイオウイカ	房州勝山で長8尺のイカを捕獲(改正甘露叢)
宝永1年(1704) 6月	レンカク(鳥)	駿河国浅畑で捕獲(博物館禽譜, 百品考三下)
宝永6年(1709) 4月6日	マンボウ	摂津国大石村で捕獲(魚鳥写生図)
宝永6年(1709) 8月20日	ブッボウソウ	狩野常信が写生(鳥写生図巻)
宝永7年(1710) ⑧月11日	アマツバメ	狩野常信が写生(鳥写生図巻)
正徳2年(1712) 1月13日	ウミテング(魚)	狩野常信が八丈島産乾品を写生(草花魚貝虫類写生図29)
正徳2年(1712) 3月5日	アシカ	備前国邑久郡福谷村(岡山の東)で撃ち取る(備陽記)
正徳4年(1714) 3月27日	マンボウ	紀伊出嶋(和歌川河口)で捕獲, 長8尺4寸(九淵遺珠)
享保1年(1716) 冬	ペリカン	堺の今地に2羽が飛来, 1羽を捕える(月堂見聞集)
享保1年(1716)	マンボウ	房州で捕獲, 見世物とする, 長3尺(随観写真・魚部)
享保2年(1717)	チョウザメ	松前藩主が將軍吉宗の命で献上(松前志)

享保4年 (1719) 2月11日	トキ	将軍吉宗、東葛西での鷹狩で1羽を得る (徳川実紀)
享保6年 (1721) 4月4日	ヘラサギ	出府した松岡玄達が上野不忍池で数羽を見る (東遊日記)
享保6年 (1721) 4月30日	ウトウ	弘前藩、幕府の求めで生鳥3羽を献上 (弘前市史)
享保8年 (1723) 5月22日	マンボウ	備前国児島郡北浦村で捕獲、岡山へ移送 (備陽記)
享保9年 (1724) 2月10日	マンボウ	土佐十市沖で捕獲 (魚鳥写生図)
享保9年 (1724) 9月	ウミガメ	房州の漁師が捕える (随観写真・介部)
享保9年 (1724)	トキ	広島藩家老が他領から取り寄せて放つ (トキの文献1193)
享保10年 (1725) 1月3日	クジラ	堺・戎島の沖に現われ、13日に姿を消す (摂陽奇観)
享保10年 (1725) 10月1日	ペリカン	常陸国土浦で捕獲、幕府に献上 (享保世話)
享保10年 (1725) 12月6日	タコブネ (フネダコ)	弘前藩、幕府の命により青森で捕えた身付きの品を塩漬にして差し出す (九淵遺珠)
享保12年 (1727) 3月	マンボウ	安芸広島海で長5尺の大魚、沖万歳を得る (皇代系譜)
享保14年 (1729) 12月10日	シマフクロウ	松前藩主が幕府へ2羽献上 (松前年々記、堀田禽譜)
享保14年 (1729) 12月13日	ヘラサギ?	将軍吉宗、瀬崎での鷹狩で「へら」を得る (徳川実紀)
享保15年 (1730) 春	ダイオウイカ	相州江ノ島で長9尺のイカを捕獲 (諸国里人談)
享保15年 (1730)	トクビレ	トクヒレの名で乾品を図示 (佐州図上)
享保16年 (1731) 9月	ペリカン	松前の馬口石で捕獲 (松前志)
享保17年 (1732) 4月5日	マンボウ	伊勢国桑名地蔵沖で捕獲 (魚鳥写生図)
享保17年 (1732) 5月22日	アカマンボウ	房州沖で捕獲し江戸に運ぶ、長4尺7寸 (随観写真・魚部)
享保19年 (1734) 2月20日	クジラ	下総国行徳で長7間と5間の鯨2頭を捕え、3月初めから江戸両国で見せる。江戸初の鯨の見世物 (月堂見聞集)
享保19年 (1734) 9月5日	ライチョウ	加賀藩、幕府の命により立山・白山に登山して実写した立山雷鳥・白山雷鳥の図を差し出す (九淵遺珠)
享保19年 (1734)	オサガメ	越前国三国の漁師が得る、甲長5尺 (九淵遺珠) ⁽⁵⁾
享保20年 (1735) 2月11日	アシカ	対馬国与良郷横浦で撃ちとる (小松1991)
元文1年 (1736) 11月	ヨタカ	『備前国備中国産物絵図帳』の「かくひ鳥」図：以下、元文3年までの記事は享保元文全国産物調査による ⁽⁶⁾
元文1年 (1736) 11月	ヨウジウオ	『備前国備中国産物絵図帳』の「針魚」図
元文1年 (1736) 11月	スナメリ	『備前国備中国産物絵図帳』の「なめ魚」図
元文1年 (1736) 11月	クダヤガラ	『備前国備中国産物絵図帳』の「もうすし」図
元文2年 (1737) 9月	マツカサウオ	『大隅国産物絵図帳・春夏』の「か〇そく魚」図
元文2年 (1737) 9月	アマサギ	『日向国産物絵図帳・春夏』の「うし鷺」図
元文2年 (1737) 9月	ヒウチダイ	『薩摩国産物絵図帳・春夏』の「ひうち」図
元文2年 (1737) 9月	セミホウボウ	『薩摩国産物絵図帳・春夏』の「せび」図
元文2年 (1737) 9月	オオセ (鮫)	『薩摩国産物絵図帳・春夏』の「おにうつ」図
元文2年 (1737) 9月	アカヒゲ (鳥)	『薩摩国産物絵図帳・春夏』の「あかひげ」図
元文2年 (1737) 9月	ハブ	『薩摩国産物絵図帳・春夏』の「はぶ」図
元文2年 (1737) 10月	ダイナンウミヘビ	『長門国産物之内絵形』の「ヒタカ」図：魚類
元文2年 (1737) 10月	コバンザメ	『長門国産物之内絵形』の「フナイトリ」図
元文2年 (1737) 10月	メタウナギ	『長門国産物之内絵形』の「スポ」図
元文2年 (1737) 11月	ギンザメ	『盛岡領産物絵図帳』の「にわ鳥魚」図
元文2年 (1737) 11月	ソコダラ類	『盛岡領産物絵図帳』の「ついさび魚」図
元文2年 (1737) 11月	ヨタカ	『盛岡領産物絵図帳』の「しびたたき」図
元文2年 (1737) 11月	カワガラス	『盛岡領産物絵図帳』の「びんくし」図
元文2年 (1737) 11月	スナメリ	『安芸国産物絵図』の「ぜごんとう」図
元文3年 (1738) 2月	コバンザメ	『筑前国産物絵図帳』の「ふなしとき」図
元文3年 (1738) 2月	ミヤコドリ	『筑前国産物絵図帳』の「みやこどり」図
元文3年 (1738) 5月	ハタタテダイ	『薩摩国産物絵図帳・秋冬』の「やばた魚」図

元文3年(1738) 5月	コバンザメ	『薩摩国産物絵図帳・秋冬』の「ふなひとり」図
元文3年(1738) 5月	エラブウミヘビ	『薩摩国産物絵図帳・秋冬』の「永良部鰻」図：爬虫類
元文3年(1738) ? ⁽³⁾	チカメキントキ	『越中国産物之内絵形』の「たいのみこ」図
元文3年(1738) ?	マツカサウオ	『越中国産物之内絵形』の「よろひうを」図
元文3年(1738) ?	コンゴウフグ	『紀州分産物絵図』の「こご魚」図
元文3年(1738) ?	メタウナギ	『紀州分産物絵図』の「もつれ」図
元文3年(1738) ?	ワレカラ	『紀州分産物絵図』の「われから」図
元文3年(1738) ?	イタチウオ	『紀州勢州産物図』の「いたちうを」図
元文3年(1738) ?	ハタタテダイ	『紀州勢州産物図』の「のぼりたて」図
元文3年(1738) ?	スナメリ	『紀州勢州産物図』の「すさめ」図
元文3年(1738) ?	コンゴウフグ	『尼崎図上』の「サイノウラ」図
元文3年(1738) ?	ヨウジウオ	『尼崎図上』の「ウミクチナハ」図
元文3年(1738) ?	アカヤガラ	『尼崎図上』の「ヤガラ」図
元文3年(1738) ?	キホウボウ?	『和泉図上』の「かなどう」図
元文3年(1738) ?	シュモクザメ	『隠岐国産物絵図注書』の「かせ鰐」図
元文3年(1738) ?	ヤツメウナギ	『出雲国産物名疏』の「七ツ目」図
元文5年(1740) 11月11日	サケイ (鳥)	仙台城近くで捕獲 (増補庶物類纂)
寛保2年(1742) 3月	シイラ	狩野家で写生 (栗氏魚譜B9)
寛保3年(1743) 11月	タイマイ	加賀国宮腰浦で捕獲 (本草綱目啓蒙)
寛保3年(1743) 12月25日	トキ	將軍吉宗, 東葛西での鷹狩で1羽を得る (徳川実紀)
延享1年(1744) 2月24日	ペリカン	江戸浅草寺で見世物, 東叡山門跡が本日観覧 (浅草寺日記)
延享1年(1744) 4月	ライチョウ	飛騨代官が幕府の命で乗鞍岳の雷鳥3羽を江戸に送る (編修地誌備用典籍解題14, 堀田禽譜)
延享1年(1744) 10月	イリエワニ?	薩州硫黄島沖で捕獲, 藩に献上, 長7~8尺 (本草綱目算疏11, 竜絵巻物)
延享4年(1747) 4月	マンボウ	伊勢浦で捕獲, 名古屋大須で見世物 (錦窠魚譜13)
寛延1年(1748) 4月2日	アシカ	越後糸魚川の浦浜で捕獲 (越後名寄)
寛延1年(1748) 5月中旬	アシカ	越後出雲崎の北, 猪鼻村へ打ち上げられる (越後名寄)
寛延1年(1748) 10月7日	サケガシラ	三浦半島の小坪浜 (逗子近辺) の網漁で捕獲, 長7尺5寸, 平鮫一名銀鮫 (随観写真・魚部)
寛延2年(1749) 3月29日	マンボウ	讃岐国香西沖で捕獲, 長9尺3寸 (泰平年表, 皇代系譜)
宝暦2年(1752) 4月	タカアシガニ	相州小田原で長1丈の蜘蛛蟹を得る (随観写真・介部)
宝暦2年(1752) 11月1日	キンチャクダイ	この日に到来 (栗氏魚譜B2)
宝暦2年(1752) 12月6日	コクガン	狩野純信が写生 (鳥類図譜)
宝暦3年(1753) 1月	チョウザメ	土佐の安芸浦で「ヨロイブカ」を捕獲, 長1丈余 (日本博物学年表)
宝暦4年(1754) 2月中旬	アシカ	越後の寺泊浦に打ち寄せられる (越後名寄)
宝暦9年(1759) 7月	ヒゴイ	江戸堺町で1尺と6寸の赤鯉の見世物 (見世物研究)
宝暦9年(1759) 10月29日	モンガラカワハギ	氏名未詳の人物が本日描く。正確な図で, のちに栗本丹洲が模写 (栗氏魚譜A17)
宝暦10年(1760) 4月15日	ブッポウソウ	大坂の浄安寺薬物会に森野通貞が雌雄を出品 (文会録)
宝暦12年(1762) 春	マンボウ	丹後国で捕獲, 長5尺7寸 (南楼随筆)
宝暦12年(1762) 4月18日	マンボウ	武蔵国羽田で捕獲, 長9尺 (翻車考, 栗氏魚譜B20)
宝暦13年(1763) 3月6日	マンボウ	江戸品川沖で捕獲, 長3尺 (宝暦現来集)
宝暦13年(1763) 夏	アカナマダ	仙台の奈武里浜で捕える (随観写真・魚部)
明和1年(1764) 1月18日	ヘラサギ	將軍家治, 亀有での鷹狩で1羽を得る (徳川実紀)
明和1年(1764) 12月18日	クロトキ	將軍家治, 小松川の鷹狩で2羽を得る (徳川実紀): 『徳川実紀』でクロトキの初見

明和2年 (1765) 7月22日	ハクビシン?	相模大山で雷雨後に捕らえた雷獣(震雷記)
明和2年 (1765) 8月?	マンボウ	江戸芝浦で捕獲, 長1丈, 両国で見世物(武江年表)
明和3年 (1766) 2月1日	クジラ	紀州熊野灘で得たという長7間半の鯨を大坂千日法善寺で見せる。大坂で初めての鯨の見世物(摂陽奇観)
明和3年 (1766) 11月27日	ヘラサギ	将軍家治, 木下川での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀)
明和3年 (1766) 12月5日	クロトキ	将軍家治, 小松川での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀)
明和5年 (1768) 1月13日	クロトキ	将軍家治, 小菅での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀)
明和5年 (1768) 5月10日	トキ	徳島藩が播磨国から取り寄せて放つ(トキの文献1027)
明和7年 (1770) 1月4日	クジラ	尾張国知多郡横須賀で捕獲, 長6間半(諸家随筆集)
明和7年 (1770) 10月	ブッポウソウ	大和松山の森野武貞が江戸に持参(日本薬園史の研究)
明和7年 (1770) 11月27日	クロトキ	将軍家治, 小松川での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀)
安永3年 (1774) 2月	ノガン	大坂道頓堀で見世物, 高野山の麓で捕えた(難波嘶)
安永3年 (1774) 8月頃	シュモクザメ?	怪魚でんぼう鯨が尾張国知多郡横須賀の海に現われたが, 形状の説明からシュモクザメらしい(諸家随筆集)
安永4年 (1775) 4月25日	マンボウ	摂津国兵庫で捕獲, 長1丈(南楼随筆)
安永6年 (1777) 11月	ベニバト	肥後国託摩(=託麻)郡重富村で捕獲(奇鳥生写図)
安永6年 (1777) 12月13日	クロトキ	将軍家治, 葛西での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀)
安永7年 (1778) 春	マンボウ	土佐国安喜郡田野浦で捕える, 長4尺8寸(南楼随筆)
安永8年 (1779) 9月2日	チョウザメ	阿波国名東郡津田浦で捕獲, 鼻先~尾先は長1間, ザウザメという(栗氏魚譜B1, 異魚図賛, 阿淡産志)
安永8年 (1779) 12月23日	クロトキ	将軍家治, 船堀での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀)
安永8年 (1779) 12月	マンボウ	越前国敦賀で捕獲, 長8尺(南楼随筆)
安永8年 (1779) 冬	マンボウ	若狭国小浜で捕獲, 長9尺余(南楼随筆)
安永9年 (1780) 8月3日	ツルクイナ	この日「松平壱岐守様ヨリ来ル」の注記(奇鳥生写図)
安永9年 (1780)	マンボウ	播磨国網干浦で捕える, 長6尺(南楼随筆)
天明2年 (1782) 2月9日	トキ	将軍家治, 王子での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀)
天明2年 (1782) 5月18日	ブッポウソウ	伊予国板島郡財村で雌雄を捕える(観文禽譜)
天明3年 (1783) 春	ブッポウソウ	京都の上賀茂で捕獲, 飼育する(笈埃随筆, 桃洞遺筆2)
天明3年 (1783) 8月中旬	クジラ	摂津住吉浦へ来る。潮を吹くのを見に大勢がつめかけ, 鯨は11月までその付近に留まる(摂陽奇観)
天明4年 (1784) 3月28日	マンボウ	豊前国恒見浦で捕える, 長5尺7寸(南楼随筆)
天明4年 (1784) 12月6日	クロトキ	将軍家治, 小松川での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀)
天明4年 (1784) 冬	チョウザメ	下総国小堀と布川の間で鮭網にかかる(兼葭堂雑録)
天明6年 (1786) 以前	サケイ(鳥)	将軍家治の治世(1760~本年)に献上(観文禽譜)
天明7年 (1787) 4月19日	ウミガメ	江戸佃島の漁夫が中川で2匹捕獲して献上, 長4尺(観文禽譜)
天明8年 (1788) 12月	ライチョウ	加賀侯が水戸相公に白山産の雷鳥を贈る(観文禽譜)
寛政1年 (1789) 1月5日	トキ	将軍家斉, 西新井での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀)
寛政1年 (1789) 1月21日	クロトキ	将軍家斉, 船堀での鷹狩で3羽を得る(徳川実紀)
寛政1年 (1789) 9月	ゲンロクダイ	山龍岳明海が写生(錦窠魚譜21)
寛政2年 (1790) 5月2日	トキ	加賀藩主, 石川郡栗ヶ崎での鷹狩で13羽を得る(トキの文献60): 寛永16年に移入したトキがここまで増えた
寛政2年 (1790) 11月18日	クロトキ	将軍家斉, 西新井での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀)
寛政2年 (1790)	ウミガメ	薩摩国高柳郡川内で捕える(本草図説28)
寛政3年 (1791) 6月	アカマンボウ	房州で捕獲, 将軍・御三卿が観覧, 長4尺2寸(栗氏魚譜C9, 奇品図会)
寛政4年 (1792) 7月	イトウ(魚)	「カラフト嶋……ツンナイ」で捕獲(博物館魚譜12)
寛政4年 (1792) 10月13日	クロトキ	将軍家斉, 亀戸での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀)

寛政4年(1792) 冬	アシカ	肥前国松浦郡大嶋の漁師が捕える(甲子夜話80)
寛政5年(1793) 春	サギフエ(魚)	水戸藩が栗本丹洲に鑑定を依頼(栗氏魚譜B2)
寛政5年(1793) 春	キホウボウ類	水戸藩が栗本丹洲に鑑定を依頼(栗氏魚譜B2)
寛政5年(1793) 8月	エトピリカ	堀田正敦がその丸剥ぎを贈られる(堀田禽譜)
寛政6年(1794) 8月	クジラ	堺の沖で捕獲, 長8間余(摂陽奇観)
寛政6年(1794) 9月中旬	コバンザメ	奥州津軽郡鯆ヶ沢の海で捕獲(小判魚)
寛政6年(1794) 冬	ウチワフグ	志摩国浪切浦で獲る(博物館魚譜10, 栗本写生図)
寛政7年(1795) 9月	アシカ	江戸葺屋町で見世物, 引札に筑前国響灘鏡ヶ崎で捕え, 京都大坂でも興行とある(甲子夜話・続23)
寛政7年(1795) 10月	シラガホオジロ	大坂で捕獲?(堀田禽譜): 原記載名は「嶋ほふじろ」
寛政7年(1795) 12月9日	クロトキ	將軍家斉, 亀有での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀): 『徳川実紀』でのクロトキの記録はこれが最後だが, この頃から記事が不完全になるので, 減ったとはいえない
寛政7年(1795) 12月?	シロフクロウ	摂津国中浜村で捕獲(堀田禽譜, 桃洞遺筆5)
寛政7年(1795)	オサガメ	琉玖(屋久島)で捕獲(博物館虫譜)
寛政9年(1797) ⑦月15日	ハナオコゼ	佐渡で捕獲(異魚図纂)
寛政9年(1797) 9月9日	マンボウ	佐渡の姫津で捕獲, 長1丈(翻車考)
寛政10年(1798) 5月1日	クジラ	江戸品川沖で突き止めた9間一尺の鯨を浜御殿に引き寄せ, 將軍家斉が上覧, ついで人々が見物(半日閑話, 海鱈談)
寛政10年(1798) 5月17日	オサガメ	水戸村岡領水木村の沖で捕獲(博物館虫譜)
寛政10年(1798) 6月	カブトガニ	瓊浦(長崎)御船蔵で図写(蟹譜, 博物館虫譜)
寛政10年(1798) 10月	ツバメウオ	岩原某が写生(栗氏魚譜B3)
寛政10年(1798)	ライチョウ	信濃国諏訪で捕獲(堀田禽譜): 原記載名は「イハ鳥」
寛政11年(1799) 冬	ホッキョクグマ?	白熊の子を蝦夷から江戸に送る(東夷物産志稿)
寛政12年(1800) 2月	イリエワニ?	奄美大島で捕獲, 「面ノ長サ三尺」(島津家動物写生図)
寛政12年(1800) 5月28日	リュウグウノツカイ	肥前国唐沢姉子の灘で捕獲, 長5尺2寸(写生物類品図)
寛政12年(1800) 夏	リュウグウノツカイ	出雲国日ノ御崎で捕獲(写生物類品図)
寛政12年(1800) 夏	ヤツメウナギ	越後国魚沼郡清津川産(北越物産写真)
寛政12年(1800) 夏	ウケクチュグイ	越後国魚沼郡千隈川産(北越物産写真): 新種と判明したのは20世紀後半だったが, 土地の人々は昔から他種と区別して「頰長」と呼んでいた。➡本間(1989)
寛政12年(1800) 夏	マツカサウオ	越後国頸城郡犀浜付近で得るが, 稀(北越物産写真)
寛政12年(1800) 9月30日	ウミガメ	八丈島より幕府に献上(博物館虫譜)
寛政12年(1800) 12月13日	トキ	將軍家斉, 小松川での鷹狩で1羽を得る(徳川実紀)
享和1年(1801) 6月12日	オオサンショウウオ	江戸板橋水車の堰下で捕獲, 長4尺1寸。同15日將軍家斉が上覧, ついで見世物となる(武江年表, 博物館虫譜) ➡本朝諸国風土記3
享和1年(1801) 6月21日	ヨウジウオ	栗本丹洲が初めて目にする, イワシに混じっていた(異魚図纂, 写生物類品図)
享和1年(1801) 秋	アカマンボウ	阿波国海部郡浅川浦で捕獲(阿淡産志, 物産宝庫・甲2)
享和1年(1801)	アザラシ	常陸国で捕える(本草図説25)
享和2年(1802) 2月	マンボウ	常陸国磯浜(現大洗)で捕獲(査魚志)
享和2年(1802) 3月18日	フリソデウオ	和歌山南方の小浦で幼魚を採る, 長5寸(桃洞遺筆4)
享和2年(1802) 5月19日	チョウザメ	幕府医学館に剥製を初めて展示(栗氏魚譜A2)
享和3年(1803) 3月	ルリハタ	房州で捕えた魚を魚商和泉屋五兵衛が田安公に献上(栗氏魚譜B10)
享和3年(1803) 4月27日	オサガメ	備前国児島アツトで捕獲, 長1間半(日本博物学年表)

文化1年 (1804) 9月15日	ライチョウ	老中安藤対馬守信成、乗鞍岳で捕えた雷鳥雄1羽を江戸城西丸に献上 (堀田禽譜) ⁽⁷⁾
文化2年 (1805) 5月16日	マンボウ	下総国船橋の漁師が捕える、長1丈1尺 (巷街贅説)
文化2年 (1805) 11月	オサガメ	越後国蒲原郡新発田で捕える (博物館虫譜)
文化3年 (1806) 4月7日	タイマイ	土佐赤岡浦で得る、長2尺ほど (桃洞遺筆5)
文化3年 (1806) 10月24日	チョウザメ	蝦夷で得た個体を戸川筑前守が江戸に持参、この日栗本丹洲が写生する (栗氏魚譜A2, 古今要覧稿556)
文化4年 (1807) 1月9日	ラッコ	蝦夷ウルップ島で捕獲 (博物館獣譜)
文化4年 (1807) 3月	アシカ	江戸の芝高輪で捕獲 (楽只亭品物図彙)
文化4年 (1807) 7月末	クロウミツバメ	下北半島西北岸の佐井で得る (堀田禽譜)：原記載名は山燕一種・黒燕
文化4年 (1807) 11月27日	アシカ	江戸高輪沖で捕獲、將軍家齊上覧 (泰平年表, 谷津1940)
文化4年 (1807) 12月19日	アシカ	対馬国与良郷安神村で撃ちとる (小松1991)
文化5年 (1808) 5月6日	オサガメ	能登国風戸浦に死んで漂着 (三州山海異品)
文化5年 (1808) 11月	タカアシガニ	名古屋東懸所前で見世物 (錦窠蟹譜1)
文化5年 (1808) 冬	ケイマフリ	エトロフ島に派遣された仙台藩士が得る (堀田禽譜)：原記載名は「しちり」
文化6年 (1809) 4月12日	ツノメドリ	尾張熱田沖で捕獲、名古屋で飼ったが、5月5日に死んだ (水谷氏禽譜, 猿猴庵文化日記, 錦窠禽譜・続12) ⁽⁸⁾
文化8年 (1811)	コウノトリ	江戸浅草称念寺の屋根に巣を作る (筠庭雜録)
文化11年 (1814) 4月	マンボウ	常陸国久慈ノ浜で捕獲 (常陸物産志16)
文化12年 (1815) 8月26日	ペリカン	豊後国海部郡搔懷郷で撃つ (堀田禽譜)
文化12年 (1815) 9月	クビワオオコウモリ	名古屋大須で「寒号虫」の芸を見せる (猿猴庵文化日記)
文化13年 (1816) 6月3日	エトピリカ	雌雄が蝦夷より来る (水禽譜)
文化13年 (1816) 7月	オオミズナギドリ	捕獲品を江戸城へ献上 (堀田禽譜)
文化13年 (1816)	レンカク (鳥)	福岡藩領内で捕獲 (禽鏡3, 百鳥譜残欠)
文化14年 (1817) 4月19日	アツモリウオ	幕府医学館薬品会への出品 (乾品か) を栗本丹洲が写生する (栗氏魚譜B15)：当時の名は龍宮ノ鶏
文化14年 (1817) 5月25日	ギンザメ	栗本丹洲が堀田正敦から乾品を借り写す (魚譜)
文化14年 (1817) 6月2日	トキ	徳島藩、田畑を荒らすので銃猟を許可する (トキの文献1027)：明和5年 (1768)に放鳥したものが増え過ぎた
文政2年 (1819) ④月上旬	アザラシ	越後柏崎で漁民が得る (耽奇漫録9集, 本間1991)
文政2年 (1819) ④月中旬	イザリウオ	栗本丹洲が写生、解説を記す (栗氏魚譜B10)
文政2年 (1819) 10月15日	オオサンショウウオ	尾張国の御伊勢川 (笈瀬川) で捕獲、翌月名古屋広小路で見世物に出る、長2尺7寸 (猿猴庵文政日記)
文政3年 (1820) 3月9日	サカマタ	江戸の品川沖で、長3間半と2間半の鯨2頭を獲る (栗氏魚譜A22, 栗氏魚譜C・鯨)
文政3年 (1820) 3月14日	エラブウミヘビ	阿波国海部郡牟岐浦で捕える。原記載名ウミクチナワ、長4尺で、「藍色ノ横条アリテ環ノ入タルガ如シ」(重修本草綱目啓蒙・補記)：爬虫類のウミヘビ
文政3年 (1820) 4月21日	クジラ	浪華木津川沖で小鯨を捕獲、長2間半 (栗氏魚譜C・鯨)
文政3年 (1820) 夏	ペリカン	阿波国那賀郡庄村に飛来、望遠鏡で数日観察・写生 (重修本草綱目啓蒙・補記)
文政3年 (1820) 7月4日	ハナオコゼ	堀田正敦が栗本丹洲に鑑定を依頼、前日まで生存していた (異魚図纂)
文政3年 (1820) 8月27日	イトヒキアジ	栗本丹洲が堀田正敦から生きた小魚を貰って写生、生魚を手にしたのは初めて (栗氏魚譜B2・10)

文政3年(1820) 冬	コバンザメ	丹波亀山藩城代松平芝陽、江戸飯田町中坂の魚店で見かける、長2尺(蘭畹摘芳三編8)
文政4年(1821) 2月	トクビレ(魚)	宮城の本吉郡歌津浜で捕える(栗氏魚譜B10, 博物館魚譜2): この魚の図で捕獲地・日付がわかるのは稀
文政4年(1821) 6月初旬	アネハヅル	尾張国葉栗郡黒田村で捕獲し藩に献上、9月將軍家齊に献上(姉羽鶴之図, 猿猴庵文政日記)
文政4年(1821) 10月	オサガメ	丹後国の沖で網にかかる(博物館虫譜)
文政5年(1822) 8月	イトマキエイ	伊予国宇和郡古田の浜で捕獲(魚譜)
文政5年(1822) 10月	カンムリツクシガモ	函館亀田村で雌雄を捕獲、翌年幕府に献上(堀田禽譜)
文政6年(1823) 4月21日	ウミガメ	尾張日置の漁師が捕え、見世物とする(猿猴庵文政日記)
文政6年(1823) 6月	イトヒキアジ	長門国萩の鶴江で、小さな個体を捕獲(栗氏魚譜B10)
文政6年(1823) 12月9日	エゾライチョウ	箱館代官新井田金右衛門が2羽を得る(堀田禽譜)
文政7年(1824) 2月28日	ウチワフグ	栗本丹洲が川村清兵衛所蔵品を写生(栗氏魚譜A17)
文政7年(1824)	リュウグウノツカイ	紀伊の古座に死魚が漂着(熊野物産初志)
文政8年(1825) 6月2日	イザリウオ	堀田正敦が大洲侯所蔵図を栗本丹洲に渡す(異魚図纂)
文政8年(1825) 9月	ギンザンマシコ	蝦夷地エトロフ嶋に渡来、数多く捕えて江戸に送り、幕府に献上、滝沢馬琴も松前侯から分与された(禽鏡2)
文政9年(1826) 2月6日	ヒゴイ	名古屋上畠橋筋で長3尺余の「猩々鯉」を見せる(猿猴庵文政日記): 名古屋ではまだ「珍物」だった
文政9年(1826) 2月19日	オオサンショウウオ	江戸へ向かうシーボルトが鈴鹿山中産の生きた個体を門人湊長安から受け取る(江戸参府紀行)
文政9年(1826) 2月27日	タカアシガニ	シーボルトが興津の手前で見ると(江戸参府紀行)
文政9年(1826) 2月27日	アホウドリ	シーボルトが三保の松原で購入(江戸参府紀行)
文政9年(1826) 3月下旬	ツシマヤマネコ?	筑前で虎ノ子と称する見世物(山猫図説)
文政9年(1826) 4月27日	トクビレ(魚)	大槻玄沢が奥州本吉郡で獲れた個体の乾品を桂川国寧(翠藍)宅に持参(蘭畹摘芳四編7, 錦窠魚譜16)
文政9年(1826) 秋	ペリカン	紀州紀ノ川河口に雌雄が出現(紀南六郡志)
文政10年(1827) 2月	アシカ	上総沖で捕獲(本草図説24)
文政10年(1827) 6月	カブトガニ	尾張国知多郡で捕獲、翌閏6月初めより名古屋広小路で見世物、大評判(猿猴庵文政日記)
文政11年(1828) 2月	アホウドリ	石見国浜田で捕獲(南風鱸図説)
文政11年(1828) 6月10日	オオサンショウウオ	名古屋柳葉師で、この日より見世物(見世物雑誌)
文政11年(1828) 冬	セミホウボウ	駿河国釜津浜で異魚を捕獲(栗氏魚譜B15, 錦窠魚譜14)
文政12年(1829) 3月	サギフエ	魚店が岩崎灌園宅?に持参(博物館魚譜9, 弘賢随筆19)
文政12年(1829) 4月	アツモリウオ	武蔵石寿が相州江ノ島で得る(奇魚類): 貝屋で乾品を入手したのではないか➡1817年4月項
文政12年(1829) 6月9日	サギフエ(魚)	毛利梅園が芝高輪で魚商から買う(次の2魚も同時、梅園魚譜3)
文政12年(1829) 6月9日	イシガキフグ	毛利梅園が芝高輪で魚商から買う(梅園魚譜3)
文政12年(1829) 6月9日	ルリハタ	毛利梅園が芝高輪で魚商から買う(梅園魚譜3)
文政12年(1829) 秋	アカマンボウ	阿波国海部郡牟岐浦で捕える(阿淡産志, 物産宝庫甲2)
天保1年(1830) 3月19日	アシカ	長崎港で撃つ(甲子夜話・続41, 図録・日本博物学事始)
天保1年(1830) 4月	アホウドリ	阿波国津田浦に死鳥が漂着(豊文禽譜)
天保1年(1830) 5月21日	ライチョウ	同日付で「栗本丹洲ヨリ来ル」と注記(梅園禽譜) ⁽⁹⁾
天保2年(1831) 1月18日	リュウグウノツカイ	筑前国志摩郡西浦で得る(写生物類品図, 栗氏魚譜B1)
天保2年(1831) 6月9日	ホウネンエビ	献上品を、將軍か大奥の依頼で鑑定(博物図19)
天保2年(1831) 7月6日	リュウグウノツカイ	土佐国幡多郡小才角に2匹漂着、1丈4尺4寸および1丈8尺4寸(写生物類品図, 栗氏魚譜B7・C10)

天保3年(1832) 1月	アシカ	平戸の釜田浦横嶋で捕獲(甲子夜話・続77)
天保3年(1832) 2月	イタチウオ	肥前平戸で捕獲, その鑑定を栗本丹洲に依頼する(栗氏魚譜B14)
天保3年(1832) 4月21日	クジラ	浪華木津川沖で長さ2間半の鯨を捕獲(栗氏魚譜A22, 栗氏魚譜C・鯨)
天保3年(1832) 5月6日	アホウドリ	江戸小石川馬場に落ちる(梅園禽譜, 甲子夜話・続77)
天保3年(1832) 8月20日	オオサンショウウオ	京都二条城の堀で捕える, 長3尺5寸(本草図説4)
天保3年(1832) 11月22日	アザラシ	筑前国糟屋郡箱崎浦で捕獲, 長5尺余(博物図12)
天保4年(1833) 5月下旬	コブシメ?	熱田沖で捕獲した長3尺余のイカを, 名古屋柳葉師で見世物とする(見世物雑誌): 図はコウイカに似る
天保4年(1833) 7月2日	アザラシ	尾張国熱田で捕獲, 見世物に出す(名陽見聞図会2下)
天保4年(1833) 11月	オオサンショウウオ	名古屋大須で見世物, 長さ3尺5~6寸(見世物雑誌)
天保5年(1834) 1月	トキ	本月刊の江戸花鳥風月名所案内『みやびのしをり』に, トキの名所として寺島白髭明神森と千住を挙げる
天保5年(1834) 1月	コウノトリ	上記『みやびのしをり』に, コウノトリの名所として上野中堂・不忍池・浅草寺・東本願寺・猿江重願寺を挙げる
天保5年(1834) 2月27日	オサガメ	江戸小田原町の魚店で, 高木春山が写生(本草図説28)
天保6年(1835) ⑦月10日	マツカサウオ	幕臣毛利梅園が乾品を写生(梅園魚譜2)
天保6年(1835) 8月2日	アオヤガラ	幕臣毛利梅園が写生(梅園魚譜2)
天保6年(1835) 8月5日	ヨウジウオ	幕臣毛利梅園が写生(梅園魚譜2)
天保6年(1835) 8月22日	ツバクロエイ	行徳の魚商が毛利梅園宅に持ち込む(梅園魚譜2)
天保6年(1835) 9月25日	イワトコナマズ	幕臣毛利梅園が写生, 琵琶湖特産種(梅園魚譜2)
天保6年(1835) 10月18日	モンガラカワハギ	宮(名古屋市熱田区内)の魚屋が持ち来る(錦窠魚譜22)
天保7年(1836) 3月28日	アネハヅル	幕臣毛利梅園が写生(梅園禽譜)
天保7年(1836) 4月29日	アザラシ	名古屋東寺町西蓮寺で, 尾張国熱田で得た個体を見世物に出す(見世物雑誌, 名陽見聞図会5上)
天保8年(1837) 2月3日	トキ	幕臣毛利梅園宅(現文京区白山)に飛来(梅園禽譜)
天保9年(1838) 5月	アザラシ	相模国辻堂に近い馬入川に2匹出現, 長5尺。昼は付近の海に出, 夜は馬入川に帰る(朝暎抄)
天保9年(1838) 6月17日	アザラシ(上項続き)	辻堂で上記のうち1匹を捕え, 23日將軍家慶が江戸城で上覧, 7月初めより両国で見世物(泰平年表続編, 海獣考)
天保10年(1839) 2月29日	ライチョウ	幕臣毛利梅園が死鳥を写生(梅園禽譜)
天保10年(1839) 4月10日	ハリセンボン	幕臣毛利梅園が知人の乾品を写生(梅園魚譜3)
天保10年(1839) 5月	ジャコウネズミ?	京都で捕獲, 部屋に香気が漂う(随意雑識・物産32)
天保10年(1839) 10月	キンチャクダイ	魚商が毛利梅園宅に持ち込む(梅園魚譜3)
天保11年(1840) 10月22日	ダイオウイカ	上総国金谷沖で捕獲, 長2間半(天保雑記35)
天保12年(1841) 春	オオサンショウウオ	江戸城の堀浚いで竜ノ口堀より捕獲, 作業終了後に堀へ戻す, 長3尺(皇代系譜)
天保13年(1842) 2月	チョウザメ	土佐国秋浦で捕獲した「菱鮫」, 長8尺(紫藤園海鯨図)
天保13年(1842) 7月初旬	ハクビシン?	周防国富田村で捕獲(皇代系譜)
弘化1年(1844) 12月	ノガン	尾張国田楽村で雌鳥を捕獲(錦窠禽譜4)
弘化4年(1847) 4月1日	ブンチョウ	京都山本読書室に雄が飛来, 1月後に雌も来て, とともに飼育。すでに本種はかなり野生化していた(百品考二下)
嘉永1年(1848) 12月21日	オサガメ	庄内加茂で捕獲, 長3~4尺(遊覧記)
嘉永4年(1851) 4月11日	クジラ	武蔵国荏原郡大井村の海岸に長さ3間の鯨が漂着, 浅草奥山で見世物とする(武江年表)
嘉永4年(1851) 4月	マンボウ	尾崎鳴尾村の浜に漂着, 堀田龍之助が鑑定, 長1丈3尺余(錦窠魚譜13)

嘉永4年(1851) 7月25日	ライチョウ	山本溪愚が越中立山の山頂付近で2羽を見る(入越日記)
嘉永4年(1851) 10月	ツシマヤマネコ	江戸西両国広小路で見せた虎は、対馬の深山で捕えた山猫だという(藤岡屋日記・珍説)
嘉永5年(1852) ②月10日	アホウドリ	庄内鶴岡で松森胤保が写生(遊覧記)
嘉永5年(1852) ②月11日	マンボウ	庄内三瀬で捕獲(遊覧記)
嘉永5年(1852) ②月16日	ツリスガラ	庄内鶴岡で松森胤保が写生(両羽禽類図譜)
嘉永5年(1852) 4月24日	エトロフウミスズメ	京都?の吉田村で捕獲(本草写生図譜)
嘉永6年(1853) 5月3日	ダイオウイカ	上総国金谷で捕獲、江戸で見世物、長1丈7尺(藤岡屋日記)
嘉永6年(1853) 5月	オオサンショウウオ	上項と同時に生品を見世物とする(藤岡屋日記)
安政2年(1855) 7月5日	チョウザメ	筑後川河口付近で捕獲(本草写生図譜)
安政2年(1855) 9月	チョウザメ	丹後国田辺で捕獲(本草写生図譜)
安政3年(1856) 4月19日	マンボウ	備前国児島郡阿津村沖で捕獲、長6尺5寸(日本博物学年表)
万延1年(1860) 4月1日	セイウチ	蝦夷川汲(亀田半島)に漂着、長5尺余(写生物類品図)
万延1年(1860) 12月17日	カンムリツクシガモ	関根雲停が江戸で写生(博物館禽譜):原記載名リキウ鴨
文久1年(1861) 3月25日	オナガドリ(尾長鶏)	名古屋の旭園博物館に出品、尾長9尺。当時は土佐藩からの持出し厳禁で珍しかったという(錦窠禽譜・続3)
文久1年(1861) 4月25日	トキ	ロシアの植物学者マキシモヴィッチ、蝦夷駒ヶ岳麓で幼鳥を撃つ(トキの文献162・164・168)
文久1年(1861) 8月11日	カンムリツクシガモ	関根雲停が江戸で翼を写生(博物館禽譜):1860年12月項と同一個体だろう
文久2年(1862) 2月24日	オガサワラオオコウモリ	幕府が派遣した小笠原諸島調査隊が母島で捕獲、江戸に持ち帰る(幕末小笠原島日記)
文久2年(1862) 5月	ハウネンエビ	江戸千住や上総の海浜近くの村で発生(博物館虫譜)
文久2年(1862) 8月	ペリカン	尾張国熱田の桜新田で捕獲(ガラン鳥図)
文久3年(1863) 11月	ルリハタ	尾張の魚商が持ち込み、伊藤圭介が写生(錦窠魚譜22)
元治1年(1864) 6月20日	コウノトリ	江戸浅草寺本堂の屋根に巣(遊覧記)
元治1年(1864) 11月24日	ソデグロヅル	江戸日本堤で松森胤保が写生(遊覧記)
慶応1年(1865) 1月18日	オオサンショウウオ	江戸浅草奥山の見世物に出る、長4尺余(遊覧記)
慶応1年(1865) 3月14日	コウノトリ	江戸本所の五百羅漢寺サザイ堂の屋根に巣(遊覧記)
慶応1年(1865) 5月15日	クロトキ	武蔵国野田で松森胤保が写生(遊覧記)
慶応2年(1866) 8月11日	ヨタカ	名古屋の東山で捕獲、ブッポウソウと誤認(錦窠禽譜2)
慶応3年(1867) 1月25日	シマノジコ	庄内鶴岡で松森胤保が写生(両羽禽類図譜)
明治1年(1868) 12月19日	カンムリツクシガモ	松森胤保が江戸浅草の鳥屋で見る(大泉諸鳥写真画譜):鳥屋の呼び名はリキウカモ
明治1年(1868) 冬	ギンザメ	阿波産のものを大坂で見る(博物館魚譜10)

- (1) ここに記したように、盛岡藩では毎年1〜数頭のオットセイを捕獲、陰茎などを補腎薬、いわゆる「臍臍」として贈呈用などに用いていた。その慶安2〜4年の記録だけを本年表に示した。もっとも、すべてが真のオットセイだったかどうかは不明である。
- (2) 従来美術書でダンチョウ(丹頂)としているのは誤り。
- (3) 『小笠原島記事』冊4に「[延宝三年六月]廿日、幕府台覧、画師ヲシテ其産物ヲ屏風ニ画カシム」との記述があるが、その屏風がどうなったかはわからない。
- (4) 狩野常信は無人島から持ち帰ったタコノキの実も写生し、『草花魚貝虫類写生図』巻10に残した。
- (5) この記載は年記を欠くが、前後の記事から享保19年と推定。
- (6) 吉宗政権下の幕府は薬剤自給の目的で、各地へ採集使を派遣したり、朝鮮人参や砂糖の国産化を試みたりした。その一環として、享保20年(1735)閏3月から4月にかけて、各藩に対し、利用の有無にかかわら

ず領内の産物の名称を書き出すように通達する。これが享保元文全国産物調査といわれるもので、各藩はそれぞれ「産物帳」を提出したが、名称だけでは実体が不明の品々には、さらに「註書」や「絵図」を出させた。本年表の元文元年（1736）から同3年までの記事は、享保元文諸国産物調査で各藩が幕府に提出した産物絵図帳の完成あるいは提出年月に置いている。『越中国産物之内絵形』以下は完成・提出日付が未詳であるが、産物帳の大半は元文3年（1738）末までに提出されたと推定されているので、すべて元文3年項に置いた。また、各資料は、「文献一覧」の『享保元文諸国産物帳』の項に一括した。

(7) 白井光太郎著『博物学年表』は、誤って文政元年（1818）の項に置く。

(8) 原記載名は「エトピルカ」だが、各資料にある図はツノメドリである。

(9) 原文は「文化元寅年」だが、同年は「子」年。十二支と本図譜の作成年代から、天保元庚寅年と思われる。

(付) 年表中の人名解説

伊藤圭介（1803～1901）：尾張の医師，通称圭介，号錦窠。水谷豊文の弟子で，シーボルトにも師事する。同地の博物家の会である嘗百社の中軸として活動，植物に詳しかった。

岩崎灌園（1786～1842）：幕臣。名は常正，通称源蔵，号灌園。小野蘭山門下で，植物に詳しかった。主著は『本草図譜』92冊。若年寄堀田正敦の庇護を受けた一人。

大槻玄沢（1757～1827）：仙台藩医，名は茂賢^{しげかた}，通称玄沢，号磐水。蘭学普及につとめたが，博物誌にも関心が深く，その編著『蘭畹摘芳^{らんえんてきほう}』42冊にも博物誌的資料が多い。栗本丹洲とは親交があり，また若年寄堀田正敦からも便宜をはかられている。

桂川国寧（1797～1844）：幕医桂川家の6代。国寧^{くにやす}は名，通称の甫賢や，号の桂嶼をよく用いた。栗本丹洲と親しかったようである。

狩野常信（1636～1713）：幕府御絵師で，木挽町狩野家の2代，狩野探幽の甥。『鳥写生図巻』『草花魚貝虫類写生図』はともに半世紀にわたるスケッチ集で，有用な博物誌資料。

栗本丹洲（1756～1834）：幕医。江戸で博物誌の伝統を築いた田村藍水の次男，名は昌臧^{まさよし}，通称瑞見（4代），号丹洲。動物に詳しく，江戸城内などで虫や魚の鑑定をしばしば依頼された。主著は『千虫譜』『栗氏魚譜』。大槻玄沢，松平芝陽，堀田正敦などと親しかった。

シーボルト，P・F（1796～1866）：文政6～12年（1823～29）在日，同9年に出府。

関根雲停（1804～77）：幕末期～明治初期に活躍した博物画家。『草木錦葉集』や『草木奇品家雅見^{がみ}』の草木画を描き，一連の『博物館図譜』にそのスケッチが多数残る。

高木春山（？～1852）：名は以孝，号春山。江戸下目黒に住み，諸侯御用達を業とし，本草を薩摩藩医の曾 占春に学んだといわれる。主著は『本草図説』（現存195冊）。

滝沢馬琴（1767～1848）：著名な文筆家だが，動植物にも関心が深かった。とくに鳥類は飼育経験も豊富で，自身が編集執筆し，養子渥美赫州^{あつみ かくしゅう}に描かせた図譜『禽鏡』がある。

堀田龍之助（1819～88）：大坂で西洋製菓業を営み，紀伊藩の本草家畔田翠山^{くらだ すいざん}に師事。

堀田正敦（1755～1832）：仙台藩主伊達宗村の末子で，堅田藩主堀田正富の養子となる。42年間も幕府の若年寄をつとめ，栗本丹洲と親しく，大槻玄沢や岩崎灌園を庇護した。自身も博物家で，『観文禽譜』『観文獸譜』『観文介譜』や，通称『堀田禽譜』などの著作がある。

マキシモヴィッチ，C・J（1827～91）：ロシアの植物学者。万延元年（1860）から元治元年（1864）まで滞日して，日本の植物を採集・研究する。

- 松岡玄達 (1668～1746)：京都の本草家。名は玄達，通称恕庵，号怡顔斎。稻生若水に師事し，弟子に小野蘭山がいる。著作は『用葉須知』『怡顔斎桜品』『怡顔斎介品』など。
- 松平芝陽 (1775～1824)：丹波亀山藩主松平信直の第7子で，同族但馬松平家を継ぎ，のち亀山藩の江戸詰城代となる。栗本丹洲と親交があり，大槻玄沢とも交流があった。以前は，幕臣の博物家設楽妍芳と混同されていた。
- 松森胤保 (1825～92)：庄内藩士で，のち支藩松山藩の付家老となる。主著『両羽博物図譜』のうちの『両羽禽類図譜』は半世紀にわたるスケッチと観察の記録で，本邦初記録の鳥類が少なくない。また，『遊覧記』は幕末期の江戸の鳥屋や野鳥などの好資料である。
- 武蔵石寿 (1766～1860)：幕臣。通称孫左衛門，号石寿・翫珂亭。江戸の博物家の会である赭鞭会の一員で，『目八譜』は江戸時代最大・最高の介類図譜として著名。
- 毛利梅園 (1798～1851)：幕臣。名は元寿^{もとひさ}，号梅園・写生斎など。『梅園魚譜』『梅園介譜』『梅園草木花譜』などの著作は幕末期最高の図譜の一つ。赭鞭会の人々などとも親しかった。
- 森野通貞・武貞：通貞 (1690～1767) は大和国宇陀郡松山に森野薬園を創始，武貞はその子息。
- 山本溪愚 (1827～1903)：京都の山本読書室を創始した山本亡羊の6男，名は維慶，字章夫，号溪山・溪愚。主著は『本草写生図譜』。

動物各論

この年表での登場件数は，狩猟対象のクロトキ (12件) とオットセイ (9) を除くと，マンボウ (28)，アシカ (14)，オオサンショウウオ (14)，ペリカン (11)，オサガメ (10)，クジラ (10)，チョウザメ (9)，ライチョウ (8)，ウミガメ (7)，アザラシ (6)，ブッポウソウ (6)，アカマンボウ，コバンザメ，マツカサウオ，リュウグウノツカイ，ウトウ (以上，各5) ……の順である。以下，いくつかのグループに分け，要点を記しておく。() 内には，該当項の記載年を西暦で示してある。

(1) 魚類

①大型の奇魚・珍魚

- マンボウが28件と飛び抜けて多いが，目立つ上に，かなり普通に見られる種類であること，動作が緩慢で捕えやすいこと，献上されたり見世物になったりして日付が残りやすいことなどが記録の多さにつながっている。マンボウとは縁遠いが，体型が似るアカマンボウも5件記録されている (1647・1732・1791・1801・1829)。うち3件が房州，2件が阿波国である。
- アカマンボウ目に属するアカナマダ (1763)，フリソデウオ (1802, 幼魚) や，サケガシラ (1748) も，1件ずつ記録されている。
- リュウグウノツカイもアカマンボウ目の大魚，細長い体 (最大10m) で鰭が赤く，また鰭の一部が糸状に長く伸びるなどの特徴から目につきやすい。年表に記載したのは下記の5件である (産地など要点だけを示した。詳細は年表を参照：以下，同じ)。

寛政12年 (1800) 5月28日	肥前国唐沢姉子の灘
寛政12年 (1800) 夏	出雲国日ノ御崎
文政7年 (1824)	紀伊の古座 (死魚)
天保2年 (1831) 1月18日	筑前国志摩郡西浦
天保2年 (1831) 7月6日	土佐国幡 ^{はた} 多郡 ^{こさつの} 小才角 (2匹)

- チョウザメ：突出した吻をもつ、体に5列に並ぶ菱形の鱗があるなど、異様な魚だからか、下記9件もの記録がある。土佐・阿波・下総・筑後・丹後と本州中部以南でも得られているので、北海道石狩川や天塩川に来る種名チョウザメ (別名ミカドチョウザメ) のほかに、近縁の数種類が含まれている可能性が高い。

享保2年 (1717)	松前藩主が将軍吉宗の命で献上
宝暦3年 (1753) 1月	土佐の安芸浦で捕獲
安永8年 (1779) 9月2日	阿波国名東郡津田浦で捕獲
天明4年 (1784) 冬	下総国小堀と布川の間に捕獲
享和2年 (1802) 5月19日	幕府医学館に剥製を展示
文化3年 (1806) 10月24日	蝦夷産の個体を栗本丹洲が写生
天保13年 (1842) 2月	土佐国秋浦で捕獲
安政2年 (1855) 7月5日	筑後川河口付近で捕獲
安政2年 (1855) 9月	丹後国田辺で捕獲

- サメ・エイ類：独特の姿をしているのでスケッチは少なくないが、年記を添えた例は限られる。年表では、異様な形態をもつシュモクザメが元文3年 (1738) の『隠岐国産物絵図注書』と安永3年 (1774) の2件、同じく異魚イトマキエイ (マンタ, 1822), ツバクロエイ (1835), オオセ (1737) の各1件だけである。
- その他：ギンザメ (1737・1817・1868), シイラ (1742) や、北方産のイトウ (1792), ダイナンウミヘビ (1737) など。ウミヘビの名がつくのは、魚類のほかに爬虫類 (エラブウミヘビ, 後出) もあるが、江戸時代には蛇扱いされず、魚の仲間とされていた。

②中型・小型の奇魚・珍魚

- 乾品とされた種類：当時は国内で液浸標本を作れず、魚類は乾燥して保存した。年表に所収しなかったタツノオトシゴやハコフグのほか、アツモリウオ (1817・1829), トクビレ (1730・1821・1826), セミホウボウ (1737・1828), マツカサウオ (1679・1737・1738・1800・1835), コバンザメ (1737・1738の2件・1794・1820), ウミテング (1712), ヨウジウオ (1736・1738・1801・1835), コンゴウフグ (1738の2件), ウミスズメ (1679), ハリセンボン (658・1839), キホウボウ (1738・1793) など、乾品には大きな鰭や、刺^{とげ}・角などをもつ奇品が多い。これらは博物家自身が乾燥標本にしたほか、各地で乾物を土産物として売っていた。とくに人気が高かったらしいトクビレやアツモリウオ, コンゴウフグ, マツカサウオは、原産地以外にもいろいろな土地に出回っていたらしい。たとえば、武蔵石寿がアツモリウオを相州江ノ島で得ている (1829) が、おそらく同地の貝屋で入手した乾品と思われる。このような場

合があるので、入手地が即産地とはいえない。

- 美しい種類：ゲンロクダイ（1789）、キンチャクダイ（1752・1839）およびハタタテダイ（1738の2件）などチョウチョウウオの仲間や、イトヒキアジ（1679・1820・1823）、チカメキントキ（1738）、モンガラカワハギ（1759・1835）、ルリハタ（1803・1829・1863）。
- 形の変った魚：アカグツ（1691）、イザリウオ（1819・1825）、イシガキフグ（1829）、イタチウオ（1738・1832）、ウチワフグ（1794・1824）、サギフエ（1793・1829の2件）、ソコダラ（1737）、ツバメウオ（1798）、ヌタウナギ（1737・1738）、ハナオコゼ（1797・1820）、ヒウチダイ（1737）、ヤガラの類（1736・1738・1835）、ヤツメウナギ（1738・1800）など。
- ③ヒゴイ：天正2年（1574）に琵琶湖の竹生島付近で捕えた2尺5寸の「金魚」は、おそらく突然変異で体色に変化したヒゴイ（緋鯉）であろう。このような突然変異個体をもとに品種改良が進められて、いわゆる錦鯉が生まれるのはやや後である。ヒゴイの見世物の初見は江戸で宝暦9年（1759）に見せた2匹（見世物研究）、珍しいとて大当たりだったという。名古屋では文政9年（1826）が初めてだった（猿猴庵文政日記）。

④研究者を出し抜いた目

日本にはウグイの仲間が数種類いるが、そのなかに下顎前端が上顎前端より長く、また上向きという特徴をもつ種類がいることを研究者が発見し、新種ウケクチウグイと名付けたのは1960年代だった。ところが、土地の人たちは18世紀末までにそのことに気付いており、「^{ホオ}頬長」という独自の名を与えていたのである（⇒1800年の項）。

また、琵琶湖・余呉湖・淀川水系にしかないイワトコナマズ（岩床鯰）という新種が発表されたのは1961年だったが、これも地元では昔から知っていてイワトコナマズ、ホシナマズ、またはゴマナマズと呼んで普通のナマズと区別していた（⇒1835年の項）。同じく1961年に新種とされた琵琶湖特産のビワコオナマズも、漁業者は古くから区別していたという（新日本動物図鑑）。

（2）魚類以外の海産動物

①クジラ・イルカ類

江戸時代には全国各地に捕鯨基地があって、それぞれの土地の漁民には珍しくもなかった。しかし、都会や内陸部の人々は容易に目にすることができなかったから、将軍の上覧に供されたり、見世物にされたりした。年表には、種名不詳のクジラ10件（1725・1734・1766・1770・1783・1794・1798・1820・1832・1851）のほかに、スナメリ（1736・1737・1738）やサカマタ（1820）の記録を挙げたが、クジラの記事は他にも少なくない。

②海獣類

- 本年表にはアシカが14件示されている。江戸時代には全国にアシカの群生地があって、各地に残る「アシカ島」「トド島（岩）」（当時はトドとも呼ばれた）の地名がそれを物語る（中村1989）。しかし、その外の地域では珍しかったらしく、江戸・大坂はもとより、『越後名寄』（1748の2件・1754）や対馬藩の記録（1735・1807）には特記されている。

- アシカ以外ではアザラシ (1801・1819・1832・1833・1836・1838) が目立ち、クジラなどと同じく、将軍が上覧したり、都会の見世物にされたりしている。セイウチ (1860) やラッコ (1615, 1807) の記録は意外に少ない。

③海亀類

オサガメが10件 (1614・1734・1795・1798・1803・1805・1808・1821・1834・1848) と多いが、一目でほかの海亀とは異なるとわかる珍しい亀というので、そのつど記録されたからか。一方、タイマイは3件 (870・1743・1806), その他のウミガメ類は計7件 (1545・1664・1724・1787・1790・1800・1823) を示したが、これ以外にも多くの記録がある。

④エラブウミヘビ (爬虫類)

2件のみ。うち『薩摩国産物絵図帳・秋冬』(1738) の原記載名は「永良部鰻」で、エラブウミヘビという現和名の由来はこの時代にまで遡るとわかる。一方、文政3年 (1820) 3月頃の原記載名は「ウミクチナワ」だが、この名称はウツボやヨウジウオなどを指すこともあるので、名前だけではそのいずれかが決められない。本項では形状の記述によって同定した。

⑤無脊椎動物

- ダイオウイカ：大イカは下記の4件があり、捕獲地はみな関東地方である。日本にはニュードウイカという別種の大イカも産するが、これは北方産なので、捕獲されたのはみなダイオウイカと考えるのが妥当だろう。なお、天保4年 (1833) 5月に名古屋で「大烏賊」の見世物があったが、これはコウイカ的な図と長3尺というサイズからコブシメと思われる。

元禄11年 (1698) 6月27日 房州勝山, 長8尺

享保15年 (1730) 春 相州江ノ島, 長9尺

天保11年 (1840) 10月22日 上総国金谷沖, 長2間半

嘉永6年 (1853) 5月3日 上総国金谷, 長1丈7尺

- タコブネ (フネダコ)：タコでありながら殻をもつ本種には古くから関心が寄せられていたが、殻だけなら時に浜辺に打ち上げられるものの、肝心のタコは簡単に手に入る代物ではない。吉宗政権下の産物調査の一環と思われるが、幕府は弘前藩に身付きのタコブネを注文し、享保10年 (1725) に望みの品を得ている。

- タカアシガニ：この世界最大のカニは東北地方～九州の太平洋沿岸に広く分布するし、生息数もかなり多かったはずだが、意外にも図示された例は数少なく、見世物にも縁が薄かった。本年表でも3件しかない (1752, 1808, 1826)。うち見世物は第2例の名古屋が唯一の事例で、ほかには年不明の見世物の記録さえ見当たらない。

- カブトガニ：現在では瀬戸内海と九州北部にだけ生息するが、享保元文全国産物調査で漢名の「蟹」か古名の「うんきう」を挙げた国は対馬・紀伊・備前備中・周防・筑前・杵岐であったし、文政10年 (1827) には尾張知多郡で捕獲されているから、かつては広範囲に生息していたらしい。ただし、カブトガニの図や詳しい記録は多くない。

- ワレカラ (甲殻類端脚目)：『古今和歌集』『伊勢物語』『枕草子』などに「われから」の名が登場するが、江戸時代になるとその実体が何かわからなくなり、ワレカラと称する図 (『佐

州図上』や『千虫譜』＝前者の図の転写)には貝か虫か正体不明の動物が描かれるにいたる。その中で唯一つ真のワレカラを正確に描いたのが、元文3年(1738)項に置いた『紀州分産物絵図』の「われから」図である。

(3) 鳥類

①古典に登場して知名度が高かった種類

- ウトウ：陸奥の外ヶ浜に伝わる伝説によると、ウトウ(善知鳥)は穴のなかで子を育て、親が「うとう」と呼ぶと、子が「やすかた」と答えて穴から出てくる。それを獵師が悪用して「うとう」と呼びかけ、子を誘い出して捕えるが、親は悲しみのあまり血の涙を流す。この話をもとにした謡曲「善知鳥」が有名となり、それがどのような鳥かに興味をもたれて、いくつもの記録が残された(1607・1666の2件・1667・1721)。
- ライチョウ：後鳥羽院の和歌「白山の松の木陰にかくろひて、やすらに住めるらいの鳥かな」などが有名になり、深山に棲む雷鳥への関心を高めた。そして、享保19年(1734)には幕府が白山・立山産ライチョウの実写図を求め、延享元年(1744)には飛騨代官が乗鞍嶽の鳥を江戸に送った。天明8年(1788)には加賀侯が白山の個体を水戸相公に贈り、寛政10年(1798)に信濃国諏訪で捕獲、文化元年(1804)にふたたび乗鞍嶽で捕獲。また、嘉永4年(1851)に山本溪愚が立山でライチョウを実見しているし、『遠山奇談』には木曾駒ヶ嶽と蓼科山、『信州採葉記』には木曾御嶽にライチョウがいる旨の記事がある。これらの記録を通して江戸時代のライチョウの分布がわかり、現在の分布状況と対比することができる。他に出所不明2件(1830・1839)とエゾライチョウ1件(1823)がある。
- ブッポウソウ(1681・1709・1760・1770・1782・1783)：高野山に深夜「ぶっ・ぽう・そう」＝「仏法僧」と鳴く鳥がいると弘法大師が詩に詠じてから、正体に関心が集まり、その声が聞こえる頃に渡ってくる美しい鳥——体は青緑色で、嘴と足は赤——現在のブッポウソウ(姿の仏法僧)がそれだとされた。しかし、このブッポウソウは「ゲッゲツ、ゲゲゲ」という悪声である。そこで声の正体がさらに探られたが、声の仏法僧がコノハズクと判明したのは昭和10年(1935)のことで、弘法大師の没後ちょうど1100年目であった。

②迷鳥

- ペリカン：本年表には計11件(1430・1654・1681・1716・1725・1731・1744・1815・1820・1826・1862)を収録したが、うち6件が8～10月、1件が夏、1件が秋であり、これらは台風に乗ばれてきた可能性が高い。このような事例はほかの種類でも見つかる。明治23年8月10日の写生なので本年表に所収していないが、『両羽禽類図譜』に描かれている最上川で捕獲したシラオネツタイチョウ幼鳥も、おそらく台風に乗ってきたのであろう。
- アネハヅル：ヨーロッパ南部～アジア東部で繁殖し、日本では稀に迷鳥として記録されるだけだが、目の後から白い房状の羽毛が垂れているなどの特徴があるので、珍重された。本年表では3件だけだが、うち2件は将軍に献上されている。

寛文2年(1662)7月9日 紀伊藩主より幕府に献上

文政4年(1821)6月初旬 尾張国で捕獲し藩に献上, 9月將軍家齊に献上
 天保7年(1836)3月28日 幕臣毛利梅園が写生

- アホウドリ：年表には下記の5件が記録されている。このほか、栗本丹洲は『信天縁海鷲図説』で、「文政初年に江戸の石川島辺で捕えた大鳥もアホウドリだった」旨を記している。江戸時代には八丈鳥島などでおびたしい数が繁殖していたので、本州や九州にしばしば飛来していたのではないかとと思われるが、確実な記録は多くない。

文政9年(1826)2月 シーボルト, 三保松原で購入
 文政11年(1828)2月 石見国浜田で捕獲
 天保1年(1830)4月 阿波国津田浦に死鳥が漂着
 天保3年(1832)5月6日 江戸小石川馬場に落ちる
 嘉永5年(1852)閏2月15日 庄内鶴岡で松森胤保が写生

- その他の迷鳥：エトロフウミスズメ(1852, 京都辺?), カンムリツクシガモ(1822, 箱館), クロウミツバメ(1807, 下北半島), サケイ(1740, 仙台：1786年頃), ツノメドリ(1809, 尾張), ベニバト(1777, 肥後), レンカク(1704, 駿河：1816, 福岡)などが記録されている。一方、オニカッコウ(1679)や、幕末でのカンムリツクシガモの3件(1860・1861・1868)は迷鳥か、海外から持ち込まれたものか不明。

③その他の希少種・珍鳥

- 当時も今も数少なかったと思われるのは、エトピリカ(1793・1816), シマゴマ(1682), シマノジコ(1867), シラガホオジロ(1795), ソデグロヅル(1667・1864), ツリスガラ(1852), ツルクイナ(1780), ヤイロチョウ(1691), ヤツガシラ(1671)など。もっとも、ヤイロチョウは輸入品の可能性もある。

- 希少種ではないが、江戸時代の人々に珍しかったと思われる種類は、アカヒゲ(1737), アマサギ(1737), アマツバメ(1710), アリスイ(1673), イワヒバリ(1665), カワガラス(1737), キバシリ(1677), ギンザンマシコ(1825), ケイマフリ(1808), コクガン(1752), ツクシガモ(1673), ヨタカ(1676・1736・1737・1866)など。

④往時はかなりの数がいたと思われるが、現在は希少あるいは絶滅した種類

- シマフクロウ：元禄元年(1688)と享保14年(1729)の2件があるが、ともに松前藩主の贈呈品・献上品。かつては蝦夷地にかなり生息していたようだが、現在では絶滅に瀕している。シロフクロウは寛政7年(1795)の1件だけで、これは摂津で捕えられた迷鳥。なお、江戸時代の著作では、シマフクロウとシロフクロウを混同、あるいは同一種と誤解している場合が少なくないので、注意を要する。

- ヘラサギ：享保6年(1721)に江戸上野の不忍池で数羽が見られており、江戸での鷹狩(1729・1764・1766)でも得られている。

- クロトキ：明和元年～寛政7年(1764～95)に計11回江戸の鷹狩で得られているほか、慶応元年(1865)の江戸でも見られている。

- ノガン：現在は迷鳥あるいは稀な冬鳥とされるが、元禄10年(1697)刊の『本朝食鑑』に「肥

州・筑州にもっとも多く」，文化2年（1805）刊の『本草綱目啓蒙』に「曠野ニ群飛シテ列ヲナス……江州（近江）ニモアリ」と記されているように，江戸時代には特定の地方にある程度の方が飛来していたらしい。年表には3件の記録（1669・1774・1844）がある。

- コウノトリ：年表には江戸の事例4件（1811・1834・1864・1865）を挙げたが，幕末期の江戸では浅草寺・東本願寺（浅草）・西福寺（蔵前）・五百羅漢（本所）・新長谷寺（麻布）などに巣があって，珍しい鳥ではなかった。しかし，明治10年代に激減し，同20年（1887）頃に東京から姿を消したという（磯野・内田1989）。ついに現在では，日本で繁殖する個体は絶滅し，少数が時々渡来するだけになった。
- トキ：江戸時代には広く分布し，美しい羽根を矢羽にする目的などで他地域から導入した加賀（1639），広島（1724），徳島（1768）の事例もある。一方では，増え過ぎて水田を荒らすため銃猟を許した場合（1669・1817）も知られている。享保元文全国産物調査でトキを記載したのは，陸奥・出羽・常陸・下野・越中・能登・加賀・出雲・隠岐・対馬・近江・播磨・備中・周防などで，蝦夷地にも少なくなかったことが『松前志』や幕末の採集記録（1861）からわかる。京都にも生息していたと『松前志』『本草綱目会識』『本草品目』『本草薬名備考和訓鈔』などに記されているし，江戸では多くはなかったが，鷹狩で捕えた事例（1719・1743・1782・1789・1800）や，自宅の庭に飛来した場合（1837）があり，名所案内（1834）にも登場する。しかし，明治維新以後各地とも激減し，すでに日本の野生個体は絶滅した。

⑤無人島（現小笠原諸島）の鳥とコウモリ

延宝3年（1675）項に示したように，幕府はこの年無人島に探険隊を派遣，その報告書など（⇒同項出典）によれば，ハシブトゴイ（固有亜種），セイケイ類の一種，アカガシラカラスバト（固有亜種），オガサワラカラスバト（固有種），オガサワラマシコ（固有種），メグロ（固有種），オガサワラオオコウモリ（固有種）が生息していたことは確実である。このうち，セイケイ類の一種（セイケイか，その近縁種と思われる）は，その後ヨーロッパの研究者が到着する以前に姿を消してしまっただけでなく，したがって標本はもちろん，スケッチも残されていない。また，ハシブトゴイ，オガサワラカラスバト，オガサワラマシコ，それに幕府探険隊が気付かなかったオガサワラガビチョウ（固有種）はヨーロッパの研究者が採集して標本は残ったが，20世紀初頭頃までに絶滅してしまった（鈴木2002・2003・2004）。残るアカガシラカラスバトとオガサワラオオコウモリも，絶滅の恐れが多分にある。なお，南西諸島に棲む別種クビワオオコウモリは，江戸時代初期から知られていた（1642・1815）。

（4）その他の動物

①哺乳類

- ハクビシン：いま各地で野生化が問題になっているが，その由来には2説ある。第一は毛皮用に海外から輸入・飼育していた個体が脱出または放棄され，それが増えたとの説，第二は元来日本に生息していたとの土着説である。江戸時代の記録では，明和2年（1765）に捕獲された「雷獣」と，天保13年（1842）に周防国に現われた奇獣が，それぞれの図からハクビ

シンではないかといわれ、土着説の証拠とされる。

- ツシヤマネコ：「虎」と称する見世物2件（1826・1851）は、ツシヤマネコらしい。なお、文政10年（1827）12月に対馬経由で朝鮮から長崎に持ち込まれたヒョウの子2頭も、初めは「虎」と称していた。本物のトラの初渡来は、開国後の文久元年（1861）である。また、渡来したジャコウネコを山猫と呼んだ場合もある（磯野1993）。
- ジャコウネズミ：明暦2年（1656）にジャガタラから長崎に侵入したとされるが、同じ頃に琉球から鹿児島にも入ったらしい。のち、天保10年（1839）に京都でジャコウネズミかと思われる記述が残るが、断定はできない。現在の分布は南西諸島・長崎・鹿児島に限られる。

②爬虫類・両生類

- イリエワニ：延享元年（1744）10月に薩摩国硫黄島で長7尺程のワニ、寛政12年（1800）2月に奄美大島で「面ノ長サ三尺」のワニが、ともに生きて捕獲された記録があり、いずれもイリエワニではないかといわれる（高島1955）。この種は東南アジアや中国南部の海岸・入江に生息するが、しばしば外洋に出ることがあり、それが流されて薩南諸島に漂着した可能性が高い。薩摩藩士で嘉永3年～安政2年（1850～55）のあいだ奄美大島に遠島にされていた名越^{なごや}左源太が記した奄美の民俗誌『南島雑話』前編にも、「住用の内海にて先年取る処の蛇龍」としてワニの図が描かれている。
- ハブ：沖縄諸島のほか、奄美諸島にも分布するので、享保元文全国産物調査の『薩摩国産物絵図帳』（1737）に「はぶ」の名で図がある。おそらく我が国でもっとも古いハブ図で、栗本丹洲の『千虫譜』にも転写されている。
- オオサンショウウオ：下記のように推古27年（619）の2件を始め、年表に計14件も登場するのは、世界最大の両生類の上、グロテスクな姿が人目につきやすい、丈夫である、見世物にも格好の品だったなどの理由からだろう。現在は岐阜県以西にだけ生息するが、過去には江戸での記録が牛込高田川、同板橋水車堰下、江戸城竜ノ口堀と3件あり、江戸の見世物2件も近辺の産の可能性が高いので、往時には関東にも分布していたのではないかと推察される。

推古27年（619）	4月4日	近江国蒲生川
推古27年（619）	7月	摂津国の堀江
延暦16年（797）	8月16日	平安京の宮殿の側溝、長1尺6寸
仁寿2年（852）	3月7日	近江国産
天和年間（1681～83）		武州の牛込高田川、長3尺
享和1年（1801）	6月12日	江戸板橋水車の堰下、長4尺1寸
文政2年（1819）	10月15日	尾張国の御伊勢川、長2尺7寸
文政9年（1826）	2月19日	鈴鹿山中産
文政11年（1828）	6月10日	名古屋柳薬師で見世物
天保3年（1832）	8月20日	京都二条城の堀、長3尺5寸
天保4年（1833）	11月	名古屋大須で見世物、長さ3尺5～6寸
天保12年（1841）	春	江戸城竜ノ口堀、長3尺

嘉永6年(1853)5月 江戸で生品を見世物とする
 慶応1年(1865)1月18日 江戸浅草奥山で見世物, 長4尺余

③ホウネンエビ

「エビ」の名はつくが, 普通のエビとは別のグループ(甲殻類無甲目)に属する。初夏の水田に出現し, 大発生すると豊年だとの言い伝えが現和名の由来である。年表には, 天保2年(1831)項と文久2年(1862)項の2件がある。前者には「正式の名称は無いので, 仮にエビムシと名付けるが, 民間ではメデタムシともいう」旨の注記があり, 詳しい観察記録と良いスケッチが残されている。一方, 後者の図には「豊年魚」の名が添えられているが, これが文久2年の頃の通称かどうかわからない。この図を所収する『博物館虫譜』は明治初期の博物局が編集した資料なので, 整理の際に新たに名を添えたのかもしれないからである。なお, ホウネンエビと同じように夏の水田に発生する小さな甲殻類に, カブトエビがある。その図も長いあいだ探しているが, こちらはまだ見付かっていない。

文 献 一 覧

- 書名の五十音順。ただし, 「姓+西暦」形式で表示した報文は書名一覧の次に置き, 著者名の五十音順に配列した。➡は, 正式書名あるいは参考文献を示す。
- 阿淡産志, 小原春造ほか, 57巻, 明治5年成, 東京国立博物館, 和2215。➡阿淡産志の研究, 福島義一, 徳島県出版文化協会, 1990年。
- 姉羽鶴之図, 猿猴庵(高力種信), 国会図書館, 特7-692: 自筆本。
- アホウドリ
信天縁海鷗図説, 栗本丹洲, 国会図書館, 特7-42。
- 異魚図纂, 栗本丹洲。➡異魚図纂・勢海百鱗, 奥倉魚仙編, 国会図書館, 別11-30。
- 異魚図賛, 栗本丹洲, 国会図書館, 亥-21。
- いんてい
筠庭雑録, 喜多村信節, 日本随筆大成, 二期7, 吉川弘文館, 1974年。
- 越後名寄, 丸山元純, 31巻, 宝暦6年自序: 翻刻, 越佐叢書15・16, 野島出版, 1978・1980年。
- 江戸参府紀行, P・F・シーボルト, 『NIPPON』第2章の訳, 平凡社東洋文庫, 1967年。
- 猿猴庵文化日記, 高力種信, 日本庶民生活史料集成, 9, 三一書房, 1961年。
- 猿猴庵文政日記, 高力種信, 日本都市生活史料集成, 4, 学習研究社, 1976年。
- 大泉諸鳥写真画譜, 松森胤保, 慶応2年自序。➡磯野・内田(1990)
- 小笠原島記事, 33冊, 国会図書館, W243-9。
- 海獣考, 千葉直胤, 天保9年成, 東京大学総合図書館, T86-130。
- 海鰐談, 木村 厚, 寛政10年刊: 影印本, 江戸科学古典叢書, 44, 恒和出版, 1982年。
- 改正甘露叢, 内閣文庫所蔵史籍叢刊, 47・48, 汲古書院, 1985年。
- かいふ
蟹譜, 栗本丹洲, 国会図書館, わ485-1, 123-30: 他館にも転写本がある。
- 快風船涉海紀事, 水戸彰考館蔵。
- 甲子夜話, 松浦静山, 正編100巻・続編100巻・三編78巻: 翻刻, 平凡社東洋文庫, 1977~1983

年。

金杉日記, 山崎美成: 翻刻, 続燕石十種, 3, 中央公論社, 1980年。

ガラシ鳥図, 清水淇川画, 国会図書館, 特7-693。

寛政重修諸家譜, 堀田正敦等撰, 文化9年成: 翻刻, 続群書類従完成会, 1964~66年: 該当するのは第3巻所収の松前家

観文介譜, 堀田正敦, 東洋文庫, 三Jaろ-64: 小野蘭山転写本。

観文禽譜, 堀田正敦, 寛政6年序: 東京国立博物館, 国会図書館などに転写本がある。

看聞御記, 後崇光院伏見宮貞成親王, 続群書類従, 補遺2, 続群書類従完成会, 1958年: 日記。

奇魚類, 武蔵石寿, 内閣文庫, 197-296: 自筆本。

奇鳥生写図, 河野通明ほか, 文化11年成, 国会図書館, 別10-38。

紀南六郡志, 畔田翠山, 8冊, 東京国立博物館, 和813。

奇品図会, 栗本丹洲, 国会図書館, 192-132。

笈埃随筆, 百井塘雨, 日本随筆大成, 二期12, 吉川弘文館, 1974年。

九淵遺珠, 丹羽正伯, 杏雨書屋, 杏1833: 岩瀬文庫本もほぼ同一内容。

享保元文諸国産物帳集成, 盛永俊太郎・安田 健編, 影印本19巻, 科学書院, 1985~95年。

安芸国産物絵図 (芸藩土産図の後半部), 同上第8巻に所収 (以下同じ)

尼崎^{ずあけ}図上, 第5巻

和泉図上, 第5巻

出雲国産物名疏, 第7巻

越中国産物之内絵形, 第1巻

大隅国産物絵図帳, 第14巻

隠岐国産物絵図注書, 第7巻

紀州勢州産物図 (略称) ➡ 紀州勢州産物之内相残候絵図, 第6巻

紀州分産物絵図, 第6巻

薩摩国産物絵図帳, 第14巻

筑前国産物絵図帳, 第12巻

長門国産物之内絵形, 第8巻: 長門産物之内江戸被差登候地下図正控 (第10巻) も参照した。

備前国備中国産物絵図帳, 第7巻

日向国産物絵図帳, 第14巻

盛岡領産物絵図帳 (略称) ➡ [盛岡領] 御書上産物之内御不審物図, 第15巻

享保世話, 編者未詳, 続日本随筆大成, 別巻5, 吉川弘文館, 1982年。

魚鳥写生図, 著者未詳, 国会図書館, 特1-3269。

魚譜, 栗本丹洲, 国会図書館, 別10-3: 自筆本, サメ類。同題別本がある。

錦窠^{きんかかいふ}蟹譜, 伊藤圭介編, 5冊, 国会図書館, 別11-7。

錦窠魚譜, 伊藤圭介編, 32冊, 国会図書館, 別11-11。

錦窠禽譜, 伊藤圭介編, 23冊, 国会図書館, 別11-10。

- 禽鏡，著作堂主人（滝沢馬琴）編，天保5年序，6軸，東洋文庫，五F2：原本。
- 熊野物産初志，畔田翠山，5巻，嘉永1年頃成：翻刻，紀南文化財研究会，1980年。
- 栗本写生図（略称）➡栗本丹洲鳥獸魚写生図，栗本丹洲，5軸，国会図書館，別7-569。
- 月堂見聞集，本島知辰：翻刻，続日本随筆大成，別巻3，吉川弘文館，1982年。
- 兼葭堂雜録，木村兼葭堂著・暁 鐘成撰，安政6年刊：翻刻，日本随筆大成，一期14，吉川弘文館，1975年。
- 巷街贅説，塵哉翁，文政12年序：翻刻，続日本随筆大成，別巻9・10，吉川弘文館，1983年。
- 皇代系譜，毛利元苗・毛利元寿（梅園），12冊，内閣文庫，141-44。
- 古今要覧稿，屋代弘賢編，原書房，1982年。
- 小判魚，筆者未詳，東京国立博物館，和4022。
- 査魚志，原 南陽，内閣文庫，197-153。
- 佐州図上，^{ずあげ}藤沢長達，享保15年序，国会図書館，W391-9：『佐抄図』『佐渡州物産』『佐渡物産志』などの異題をもつ資料もある。本書は『享保元文諸国産物帳』の一つとして扱われることもあるが，記載形式からそれとは無関係と思える。
- 三州山海異品，阪 尚教，国会図書館，特1-3050。
- 三代実録，新訂増補国史大系，吉川弘文館，1934年。
- 紫藤園海鯊図，畔田翠山，杏雨書屋，貴171：サメ類。
- 島津家動物写生図，編者未詳，山階鳥類研究所蔵。
- 写生物類品図，編者未詳，国会図書館，別10-43。：同題別本があるので注意。
- 承寛襍録（諸留書），10冊，内閣文庫，150-122。
- 諸家随筆集，高力種信編。➡鼠璞十種，三田村鳶魚編，上巻，中央公論社，1978年。
- 諸国里人談，菊岡沾涼，寛保3年刊：翻刻，日本随筆大成，二期24，吉川弘文館，1975年。
- 庶物類纂，稻生若水・丹羽正伯編著：影印本，科学書院，1987～89年。
- 信州採葉記（略称）➡天保七丙申年七月廿七日ヨリ御葉園採葉為御用罷越之記，大窪昌章：翻刻，濃州信州採葉記，随筆百花苑，4，中央公論社，1981年。
- 信天縁海鷗図説➡アホウドリ……
- 新日本動物図鑑，岡田 要ほか，北隆館，1965年。
- 震雷記，後藤梨春，明和4年刊，国会図書館，特1-3436。
- 随意雑識，岩永文禎，杏雨書屋，研1898。
- 随観写真，後藤梨春，1757年序：20巻完本は東京国立博物館のみ，魚部・介部は転写本多し。
- 図録・日本博物学事始，サントリー美術館，1987年。
- 摂陽奇観，浜松国歌輯：翻刻，浪速叢書，1～6，名著出版，1977～78年。
- 浅草寺日記，第1巻，浅草寺：翻刻，金龍山浅草寺，1978年。
- 草花魚貝虫類写生図，狩野常信，29巻，東京国立博物館，A4555。→磯野2004
- 泰平年表，大野広城編，天保12年刊：翻刻，続群書類従完成会，1979年。
- 泰平年表続編・第一，続群書類従完成会，1982年。

- 耽奇漫録，山崎美成編，日本隨筆大成，一期別卷上・下，吉川弘文館，1993・94年。
- 探幽縮図，狩野探幽，同朋舎出版，1981年：ソデグロヅルは「鷹絵巻」に所収。
- 朝嗽抄，貴志忠美，岩瀬文庫，109-66。
- 鳥類図譜，神谷栄秋・神谷栄寿画，国会図書館，YR2-28：熊本侯藏図の転写。
- 通航一覽附録，林復斎ら，安政3年頃成：翻刻，泰山社，1940年。
- 天保雜記，藤川整斎，内閣文庫所蔵史籍叢刊，32～34，汲古書院，1983年。
- 東夷物産志稿，谷元旦？，国会図書館，特1-2990：影印本，近世歴史資料集成Ⅱ期－6，科学書院，1994年。
- 当代記，著者未詳：翻刻，史籍雜纂，2，国書刊行会，1911年。
- 桃洞遺筆，小原桃洞，6冊，天保4年・嘉永3年刊：影印本，江戸科学古典叢書，28，恒和出版，1980年。
- 東遊日記，松岡玄達，緒鞭叢書，上巻，内閣文庫，特96-1。
- 遠山奇談，華誘居士，寛政10年・享和元年刊：翻刻，日本庶民生活史料集成，16，三一書房，1970年。
- トキの文献（1～10），安田健，応用鳥学集報，3～9巻，1983～89年。
- 徳川実紀，林述斎監修・成島司直ら編：翻刻，新訂増補国史大系，吉川弘文館，1929～36年。
- 鳥写生図巻，狩野常信，8巻，東京国立博物館，A4554。➡磯野2003A
- 長崎年暦両面鏡➡〔新編増補〕長崎年暦両面観，打橋竹雲原著，長崎県立長崎図書館。
- 難波漸，池田正樹，隨筆百花苑，14，中央公論社，1981年。
- 南島雜話，名越左源太，安政2年頃成？：翻刻，平凡社東洋文庫，1984年。
- なんぶとう南風簾図説，栗本丹洲。➡『視聴草』（内閣文庫所蔵史籍叢刊－特刊第二），第10巻，汲古書院，1985年：続三集3に所収。「図説」の題だが，図は無い。
- 南楼隨筆，小野蘭山，東洋文庫，三Jaろー25：自筆本。➡磯野2003B
- 日東魚譜（元文6年序本），神田玄泉，国会図書館，特7-197：序の年が異なる4種類があり，それぞれ構成と内容が多少異なる。
- 日本紀略，編者未詳：翻刻，新訂増補国史大系，吉川弘文館，1929年。
- 日本書紀，舍人親王ら編：翻刻，新訂増補国史大系，吉川弘文館，1951・52年。
- 日本博物学年表（改訂増補版），白井光太郎，大岡山書店，1934年。
- 日本薬園史の研究（改訂増補版），上田三平著・三浦三郎編，渡辺書店，1972年。
- 入越日記，山本溪愚，山本讀書室蔵：正橋1999より引用
- 梅園魚譜1・2➡梅園魚品図正，毛利梅園，国会図書館，別4222：本来は次項と併せて3巻。
- 梅園魚譜3➡梅園魚譜，毛利梅園，国会図書館，別4223。
- 梅園禽譜，毛利梅園，国会図書館，別4224。
- 博物館魚譜，17冊，東京国立博物館，和863：明治前半に博物局が編集，下3点も同じ。
- 博物館禽譜，3冊，東京国立博物館，和957。
- 博物館獸譜，2冊，東京国立博物館，和956。

- 博物館虫譜，2冊，東京国立博物館，和959：爬虫類・両生類・甲殻類。
- 博物図，著者未詳，20冊，内閣文庫，196-174。
- 幕末小笠原島日記，菊池作次郎，緑地社，1983年。
- 半日閑話，大田南畝：翻刻，日本随筆大成，一期8，吉川弘文館，1975年。
- 常陸物産志，木内政章：『錦窠魚譜』冊13より引用。
- 百鳥譜残欠，栗本丹洲，国会図書館，特1-3125：自筆本。
- 百品考，山本亡羊，天保9年・嘉永1年・嘉永6年刊：影印本，科学書院，1983年。
- 備陽記，石丸定良，享保6年序：影印本，日本文教出版，1965年。
- 弘賢^{ひろかた}随筆，屋代弘賢，60冊，内閣文庫，特95-4。
- 弘前市史・藩政編，弘前市史編集委員会，弘前市，1963年。
- 武江年表（増訂版），斎藤月岑：翻刻，平凡社東洋文庫，1968年。
- 藤岡屋日記，藤岡屋由蔵：翻刻，三一書房，1987～95年
- 物産宝庫，田中芳男編，32冊，東京大学総合図書館，A00-5765：甲乙の2部から成る。
- 文会録，戸田旭山編，宝暦10年刊：影印本，江戸科学古典叢書，45，恒和出版，1982年。
- 文徳実録，新訂増補国史大系，吉川弘文館，1934年。
- 編修地誌備用典籍解題，文政6年序，17冊，国会図書館，124-235。
- 北条五代記，三浦浄心，寛永18年刊：翻刻，[新訂増補]史籍集覧，6，臨川書店，1967年。
- 豊文禽譜，水谷豊文，国会図書館，特7-658：自筆本，水谷禽譜とは別資料。
- 宝暦現来集，山田桂翁，天保2年自序：翻刻，続日本随筆大成，別巻6・7，吉川弘文館，1982年。
- 北越物産写真，亀井協従，寛政12年6月跋，国会図書館，W373-35：自筆本，同年夏に北越を巡回して作成。『越後国産真図』『後越物産生写』も同本である。➡本間・蒲原（1999）
- 堀田禽譜➡禽譜，堀田正敦，東京国立博物館，和954・和955・和962。
- 翻車考，栗本丹洲，文政8年成，国会図書館，別11-29：「翻車」はマンボウ。
- 本草綱目会識，小野蘭山述・寺尾隆純筆記，東京国立博物館，和168。
- 本草綱目啓蒙（重修版），小野蘭山著・梯^{かけはし}南洋増訂，弘化1年刊。
- 本草綱目啓蒙（重訂版），小野蘭山著・井口望之訂，弘化4年刊：翻刻，平凡社東洋文庫，1991～92年。
- 本草綱目纂疏，曾占春，13巻＋附録，内閣文庫，196-59。
- 本草写生図譜，山本溪愚，9冊，雄渾社，1981年：影印本。
- 本草図説，高木春山，195冊，岩瀬文庫，45-11：自筆本。
- 本草品目，西沢保吉・阿那辺有恒，天明元年成，岩瀬文庫，1-102。
- 本草薬名備考和訓鈔，丹波頼理，文化4年刊，国会図書館，105-62。
- 本朝食鑑，人見必大，元禄10年刊：現代語訳，平凡社東洋文庫，1976～81年。
- 本朝諸国風土記，僧敬順（十方庵），14巻，寛政12年序，国会図書館，235-113。
- 松前志，松前広長，天明1年序：翻刻，北方未公開古文書集成，1，叢文社，1979年。

松前年々記, 松前広保・松前広時・高橋盛明編: 翻刻, 松前町史・資料編 1, 松前町, 1974年。
水谷氏禽譜, 水谷豊文, 国会図書館, 寅-12: 転写本。

見世物研究, 朝倉無声, 思文閣出版, 復刻版, 1977年: 元版, 1928年。

見世物雑誌, 小寺玉晃, 文政11年序: 翻刻, 三一書房, 1991年。

みやびのしをり, きぎすのや則房, 天保5年刊, 国会図書館, 特1-3144。

名陽見聞図会, 小田切春江 (歌月庵喜笑), 天保4年序, 1~6・8編: 翻刻, 美術文化史研究会, 1987年。

盛岡藩雑書 (盛岡藩家老日記): 翻刻, 盛岡市教育委員会・盛岡市中央公民館編, 熊谷印刷出版部, 1986年~。

山猫図説, 桂川国寧, 文政9年成➡今泉源吉, 『桂川家の人々』, 続巻, 篠崎書林, 1968年。

遊覧記, 松森胤保: 後半は幕末期の江戸の鳥屋や野鳥の記録に富む。➡磯野・内田 (1989)

楽只亭品物図彙, 大坂屋四郎兵衛, 杏雨書屋, 研3705: 自筆本。

らんえんてきほう
蘭晚摘芳 (原本), 大槻玄沢編著, 四編39巻, 東京国立博物館, 和114。

栗氏魚譜 A, 栗本丹洲, 22軸, 杏雨書屋, 洗4-1~22: 自筆本

栗氏魚譜 B, 栗本丹洲, 10冊15巻, 国会図書館, 別11-31: 転写本, 表中の数字は巻番号。

栗氏魚譜 C, 栗本丹洲, 12冊12巻, 国文学史料館資料館, 祭魚洞文庫本: 転写本

『栗氏魚譜』は各本ごとに巻構成と内容が異なる。原本の形状については、『錦窠魚譜』冊29にある伊藤篤太郎の以下の記述が参考になる。

「伊藤篤太郎按……家蔵栗本氏魚譜 [上記B], 凡二十巻アリ。コノ魚譜ハ栗本鋤雲翁ヨリ借用シテ影写セルモノナリ。余ハ少年ノ頃, 鋤雲翁ノ東京本所ノ邸へ時々此魚譜ノ原本ヲ借り換ヘニ行キシコトアリ……原本ハ何レモ巻物ニテアリシ」

竜絵巻物, 栗本丹洲, 国立科学博物館: 自筆本。

両羽禽類図譜, 松森胤保, 明治16年序, 14冊, 光丘文庫蔵『両羽博物図譜』に所収。➡磯野1989, 磯野・内田 (1991)

両羽爬虫図譜, 松森胤保, 1冊, 光丘文庫蔵『両羽博物図譜』に所収。➡磯野1989

* * * *

磯野直秀 (1989), 『両羽博物図譜』の研究2 (成立までの経緯と各部の概要), 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 6号。

磯野直秀 (1993), 明治前鳥獣渡来年表, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 13号。

磯野直秀 (1997), 日本博物学史覚え書5, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 22号。

磯野直秀 (2002), 日本博物学史覚え書12, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 31号。

磯野直秀 (2003A), 博物誌資料としての『鳥写生図巻』, MUSEUM, 584号。

磯野直秀 (2003B), 小野蘭山の随筆, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 34号。

磯野直秀 (2004), 博物誌資料としての『草花魚貝虫類写生図』, MUSEUM, 590号。

磯野直秀・内田康夫 (1989), 『遊覧記』に見られる江戸の鳥類, 慶應義塾大学日吉紀要・自然

科学, 7号: 該当部分の主要記事を翻刻してある。

磯野直秀・内田康夫 (1990), 『両羽博物図譜』の研究4 (『銃獵誌』から『両羽禽類図譜』へ), 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 8号。

磯野直秀・内田康夫 (1991), 『両羽博物図譜』の研究5・6 (『両羽禽類図譜』), 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 9号・10号。

小松勝助 (1991), 対州産物覚帳の解説, 『享保元文諸国産物帳』第11巻, 科学書院。

佐藤次男 (1978), 徳川光圀と快風丸の蝦夷地探検について, 水戸史学, 8号。

鈴木惟司 (2002・2003・2004), 覚え書き: 江戸時代初期小笠原で日本人船乗りたちが出会った鳥, 東京都立大学小笠原研究年報, 25号・26号・27号。

高島春雄 (1955), 日本のワニ, 山階鳥類研究所研究報告, 1巻7号。

中村一恵 (1989), ニホンアシカ: その分布と絶滅をめぐって, 日本の生物, 3巻12号。

南部久男 (2000), 富山県で絶滅した大型動物の記録4, 富山市科学文化センター研究報告, 23号。

本間義治 (1989), 古記録からみた^{ホオナガ}類長 (未記載種ウケクチウグイ) の分布, 新潟県生物教育研究会誌, 24号。

本間義治 (1991), ^{たんき}耽奇漫録に載せられた海獣 (鰐脚類) の図, 鯨研通信, 381号。

本間義治・蒲原 宏 (1999), 『越後国産真図』に載せられた動物, 新潟県生物教育研究会誌, 34号。

正橋剛二 (1999), 近世後期における本草学史上の立山について, 富山県立山博物館調査研究報告書, 富山県立山博物館。

安田 健 (1987), 『江戸諸国産物帳』, 晶文社。

谷津直秀 (1940), 隠れた博物学者^き亀協従, 植物及動物, 8巻, 1207~1209頁。

謝 辞

本研究に際して, 長谷川 充氏から快風丸および『松前年々記』関係の資料を提供していただきました。この場を借りて, 厚く御礼を申し上げます。